大正十四年十月一日發行

婦人衛生雜誌

第三百七十一號

婦人衛生

第三百七十八號

兒童の想像したコレラの姿





「コレラ」物語

これは故醫學博士宮本叔先生の遺著でありまして、當時單行の冊子として世に頒たんとの企でありましたが、少しく時期が遲れましたので、何れ次回の流行に備へることゝして、そのまゝになつてゐたものでありました。然るに先生は其後間もなく物故せられましたので、このまゝ篋底に收め置かるゝのも遺憾な次第であると云ふ所からして、先生の知友故舊相談の上、大正十一年十一月から十三年十月に亙つて雜誌『醫談』に分載せられたことがあります。併しこれは、ほんの一部分の御醫者方の一粲に供せられた迄で、先生の素志を完うしたものではありません。然るに茲に又々「コレラ」襲來の報告あるを機會に、曾て本會の賛助員として好意を有たれた博士のこの遺著を會員諸姉に頒つことは、確かに故博士の素懐に適ふ事であらうと信じ、又時宜に適せることでありますから、その當時不肖編者が親しく先生の口授を筆記したと云ふ關係もあります所から、特にこれを乞受け、一纏として本號をこれに充てた次第であります。

これを一讀されれば「コレラ」の特性、その傳播の經路、從てその豫防法等を會得されるに相違ありません。

（編者しるす）

虎列剌物語の由來

去ぬる大正七年初秋の頃、虎軍帝都を襲ふの由聞えければ、時の駒込病院長宮本叔博士は、固より沈勇、武略の城主として防戰をさ〳〵怠なかりけるが、既に本所、廣尾等の塞にも捕虜數多くなりけ

る程に、軍の將帥にとも亦　雜兵以下、城下の住民に普ねく戰略の方針を授け置くこそ肝心なれ、然れども直に六韜三略を講ぜん事、弓矢取る身こそあれ、並々の人には詮なきことなれば、專ら物語體に說きなして讀む程に、聽く程に、興に乘じて自ら兵法の要義を會得せしめんには如かじと、庄司が宿を三度迄訪れて、兵法口授筆記の事をぞ命ぜられける、然らば直ちに馳せ參ずべきの由約定なしその日の夜より淡路町なる本邸に參じて只二人のみ樓上の一室に立籠り、博士は左右に參考の卷々を備へて、先づ「コレラ」家の系圖より始めて、彼れが一族の戰法數々の實戰に於ける戰鬪の狀況さながら見るが如く講ぜられけるを、一管の鉛筆に受止めつゝ雜記帳にぞ書き付る。斯ること每夜の如くにして、大凡十日許にて畢りたりけるが、此間博士は殆ど晝夜の防戰に流石疲勞も覺えられけるべきに、往々夜の十二時、一時過ぐる頃迄も講ぜられけり、殊に持病の神經痛に惱まされては「アンチチルフイン」などを服しつゝ講じ續けられけるが、漸く淨書畢りて一卷の「コレラ」物語の草稿を携へ參邸しけるに、恰も所勞の由にて臥せられけるを、對面苦しからずとて病牀近く寄せられけり。草稿畢了の由申ければ、斜ならず喜ばれ、然らば皆試みに聽けとて、夫人を始め書生の衆迄も一座に呼寄せられ、庄司は一机の文机を前に扇子打敲きつゝ太平記讀にぞ讀んだりける。博士は病苦打忘れたるかの如く微笑みつゝ面白しとありければ、滿座、かくては物の怖さも打忘れて、只面白しとのみや思はれなんとぞ評し合ひける。然るに此時しも虎軍退散の由沙汰しければ、この兵法今あわたゞしく頒布するに及ばず、然れども何條曲者なれば、こゝ數年が程にして又々押寄せ來らんこと必定なれば、暫く兵庫に藏め置けとて夫人が手下に渡されけるを、果せる哉名將の遠鑑少しも違はず、本年こゝに再び虎敵の來襲を見る。是に於て我黨の將卒評定の末、忽ち之を世に頒ちて故博士の弔合戰せばやと急ぎ印刷に附するものなり。茲に事の

由來を記する者は雜兵の一人非司秋次郎。

第一「コレラ」家の武勳

結核菌は我黨の旗頭と稱せられて居る、然し彼等の陰險なる性質は我輩の好まざる所。彼の淋菌の如きに至つては、到底我等武菌の風上にも置くべからざる輩である。然るに彼等は、嘗て千駄木の猫が動物界の爲に氣焰を揚げたる顰に傚ひ、妄に「我輩」を振廻はして銘々勝手なる手柄話を吹聽して居る。然れば人類の敵として最も武名を轟かして居る我輩が、玆に我一門の武勇談を試むるも敢て遠慮には及ぶまいと思ふ。

そもそも我儕が祖先の發祥地を考ふるに、天竺は恒河の河口に在り。正系の子孫今猶ほ其地に蟠居し、綿々として後を絕たず、時に外征を企て、勇を四隣に震ふて居る。然し大方の名門と稱せらるゝものと等しく、其の發祥の年代に至ては舊記これを缺いて居る。彼の釋迦が水の濾過法などを勸めて居る所などより考ふれば、我々の祖先は既に其頃彼等を脅かして居たものとも考へられる。渠をして人生朝露の感を懷かしめたのも、蓋し我々が大に與つて力あつたのではあるまいか。

又我々は今日に至る迄何故に斯く人間を敵として戰はねばならぬかと云ふ因緣に就ては、自分ながらよく之を知らぬ。只兎に角人間を滅ぼさねばならぬと云ふ血脈のみ祖先より傳へられて居るのである。然るに我々の仲間の一變菌が、其の由來を揣摩して此の如き說をなした。それ幾十億劫の昔、我々の一族たる植物と動物とは相對して宇宙の二大名門であつた。然るに動物共は彼等兇暴の性質を逞うして我々君子の如き植物を征服なし、我々植物界は今日の如く唯々として只彼の用に供せらるゝに至たのであらう。動物界に於ても彼等は互に相呑噬し、奸智に長けたる人類なるものが最も勢を逞うして盟主となり、他を獸類蟲類と名づけて侮蔑するに至つた。人間相互の間に於てすら尚階級を設けて、穢多非人なる名稱を附し之を彼等と獸類との中間に置た

のを見ても大方は想像することが出來る。我々は元來植物界の名門であつたが、褒子に對する晉の豫讓の心を以て身を最下等の黴菌に下し、人間の目を遁れて彼等の在らむ限りは仇を報ぜんと欲したので、この祖先の執着心は世を重ぬるに從つて益々強く今日我々は此目的の爲に生まれ、此目的の爲に死するやうになつたのであらう。是が黴菌の臆測した所であるが、或はさうでもあらう。兎にも角にも我輩等生存の目的、我輩等の一擧一動は彼人間共を滅ぼし呉れむと云ふ一念の外には何もない。其理由などは考ふる餘地はないのである。斯の如くにして祖先以來我々が人間を惱まし來れる武勇の歷史は世々に語り傳へられて居る。我々は天竺附近の人間を苦しめつゝある間に世界交通の稍開くるに方て漸次全世界に手を延すに至つた。我々と他國との交渉については、百年以前は記錄が充分でない。其より以降に於ては東西諸國の人心を震駭せしめたること一再に止まらぬ。その歐米侵略史の如きは他に讓つて自分は自分の專門たる日本侵略史に就て物語らうと思ふ。

我軍の初て日本を侵したのは、今を去ること九十五年前文政の五年であつた、當時我が勇敢なる盟主は大擧して人類を殲滅せむと企て、一軍は先づ西方に遣り、一軍は南洋より進で支那の南部を侵し、ジヤワ、バタビヤより蘭人の船に搭じて、恰も舊曆七八月の候、日本は長崎に侵入し、勢に乘じて門司より萩を衝き、八月中旬に至つては日々數十人を屠り、海路中國を掠めて、八月下旬大阪に迫り、船を安治河の河口に止め、トロヤ戰爭の故智に傚つて兵を一旅客の懷中に潛ましめて、とある客舍に入らしめ、その一家を鏖殺せるを手始めとして、陸上市內を脅かし、尙ほ溝渠を利用して島の內、天滿の邊を略し、淀の船に依つて淀、伏見を窺ひ、七條邊より京都を侵し、遙かに軍を進めて江戶城を攻めむとした。即ち東海道を經て已に沼津に達したが、我等熱帶産の軍兵は、氣候の寒さに堪へずして箱根の嶮を越ゆる能はず、空しく茲に豫定の退却を行ひ、モス

クワに於けるナポレオンと千秋の遺憾を同じうするに終つた。これが第一回日本攻擊の概略である。

當時日本に於ては、我軍に對する智識の全く缺乏して居たが爲に、我々の行軍は甚容易であつたが人間の恐慌は實に甚だしく、只其時の過去らむことを願ふの餘り、十月を以て既に改年と看做し、日本の風俗たる松竹を門に立て或は雜煮を祝ふて役年の去れるものと假想したやうの處もあつた。

第二回の日本征伐は、今を去る事五十九年、安政五年の事である。此時は前回に比し大勝を得て、江戸より奥羽の邊まで進擊し、人を屠ること數十萬と註せられた。是より先き四年、我一軍は歐洲に進み獨逸、露西亞を蹂躪し、一軍は南洋、支那より進んで日本に向ひ、支那に於て米艦「ミシシッピー」號に切入り、之に乘じて長崎に侵入したのは五月下旬頃であつた。之より第一回の道を經て六月中旬より中國、東海道に軍を進め、七月上旬には已に江戸に乘入り。十月下旬まで戰鬪を繼續し、進んで奥羽に轉戰した。その戰鬪の最も劇しかつたのは八月で、八月初旬には一日百餘人、中旬には一日六百人、下旬に於ても猶ほ一日四百餘人を殺戮し、一箇月間の首級無慮三萬二千餘人と註せられた。當時敵軍が全都の寺院に就て、七月十七日より九月三十日迄五十五日間の死亡者數を調査した處に據ると二十六萬八千五十七人の多きに達したと云ふ。此數の内我軍の手にかゝつた者幾人であるか舊記の徵すべきものがない。

一體安政と云ふ年代は、江戸にとつては最も災厄の多い年代で、先づ其二年には大地震がある。三年には大海嘯があつて築地の西本願寺といふ大伽藍すらも風と水との爲に破壞せられて微塵となつた。其他亞米利加や露西亞を初め諸國が開國を迫つて居る幕府は開國を許したと言ふて攻擊を崇むる。其五年には、我輩等は、開國談判などと云ふ手緩き手段を用ゐず、直に江戸城下に軍を進め、將軍家定は薨去する、江戸の狼狽い方は實に非常なものであつたが

我輩等の大勝記念として、當時如何に彼等を狼狽せしめたかと云ふことを後世に語り傳へて置きたい。
さて當時我々は如何に猖獗を極めて彼等を苦しめたかと云ふことは、敵軍戰死者の數でも分かるが、江戸市中に於ては戰死者の多い爲に棺桶が間に合はず、普通の桶や樽、其他苟も釘と金鎚とを手にする程の者は悉く棺桶の製造に從事した、所が棺桶は出來ても之を土葬し又は火葬するに間に合はず、小塚の原を初めとして約七箇所の火葬場はあつたが火葬する迄には十日或は半月を要し、屍體は火葬場寺々に山の如くに積まれ、其慘狀目もあてられず、茶毘の臭のみならず、腐れたる屍骸の臭氣は小塚の原より淺草、下谷、神田に臭ひ渡つたと云ふ。

『埋めはこむ燒場はこまる苔の中に
　何とて魚くへなかるらん』
お寺は喜べ二日で佛になつたわやい。

この菅原傳授をもぢつた當時の落首は眞に其當時を想見せしむるに餘りある。

又我輩等の何たるを知らぬ彼等は、我輩等の本體に就て種々なる想像をした、第一には普通の神罰或は疫病神の類だと考へた。從てその豫防法もなかなか奇拔である。或者は天狗から疫病神を拂ふ禁厭の方法を授かつたと稱して羽團扇に擬らへた「ヤツデ」の葉を門毎に吊すことが流行した。當時儲つたものゝ中に「ヤツデ」の葉が加へられてあるのを見ても其狀況が想像される。又疫病神の禁厭として種々の呪文風の物を門口に貼つた。例へば赤染衛門の其子の病氣に對する祈禱の歌であるとか、明智光秀の娘の詠むだ歌だとか其他種々の奇怪なるものがある。又町町に松竹を立て注連を張り、追儺の豆を撒くとか、其騷は非常なもので、我々は大に軍中の鬱を散じた又我々が患者の筋肉に攣縮を起さしめるのを見て、異國人が細狐を伴れて來て、日本人を殺し盡すときは汝に位を與へるといふて放つたといふ空想を描て、これが爲め王子の稻荷などは大儲をしたが、病人は打かれたり、縛られたり、苦虐に逢ふて、敵なが

らも助けてやりたいやうな心持がした。又玉川上水に毒が混じつて居るといふ噂をたてたものがある。
この噂を聞た時は、御近所まで來たなと我々は一寸心配をした。然しその豫防法を見て大に安心した甲州の日蓮宗と稱する者が、深川の或る寺に來て盛に毒消しの御符と唱ふる物を賣て、一日に其時の金で三十兩以上もせしめたと云ふやうな始末であつたこれが鹽酸や石炭酸でなかつたから我輩等は毫も痛痒を感じなかつた。これよりも我々に取て一層不都合であつたのは、彼等は魚類に毒があると言ひ出して魚を食ふ者が段々減じた事で、殆んど今日の通りであつた。これは我々の軍略上に影響が無いではなかつた、特に我々の援兵たる鰯が最も疑を被むつた。當時俗謠中に『さかなやが、いわしをかついで、おいしやのまへで、たがひにしあんのかほとかほ』の文句のあるのでも凡そ其狀況が分かる。又我輩の餘力の及ぼす所、敵ながらも惜しむべき人間を多く殺したのは氣の毒であつた。畫家の初代廣重、高久隆古、菁々其一、書家の市川米庵、大竹蔣塘、狂句師の五代目川柳、戲作者の柳下亭種員、山東京山、其他淸元延壽太夫、杵屋六左衛門、尙ほ當世に名を得たる俳優又は太夫などゝ稱せらるゝ者も大分手にかけた。將軍家定すらも我々の手に掛つたと噂されて居るが、これはさうではない。其他當時の狀況を知るべき資料として眞面目な記錄或は落首、狂文替歌、雜書等が多く出來て居る。これは我輩等の侵略史の一材料たるのみならず、幕末人心の不眞面目なる點を見るの好材料である。我等は斯の如き狀態を見すまし、十月に至つて凱旋した。
第三回の日本襲擊は文久二年に行はれた。我々の侵入するに先立つて既に麻疹の一軍が盛に江戸を侵掠しつゝあつたので、我軍は之に聯合して突擊した然し聯合軍であつただけに我々の軍功を單獨に談ずることの出來ないのは遺憾である。
第四回は明治十年である。我輩等はその七月頃既にアモイ迄日本征討の軍を進めたが、日本も餘程樣

子が變つて來て、早くも我々の狀况を探知し、長崎等の船舶に檢疫を始め、處々に隔離所等を準備したと云ふことを聞き、輕擧を愼み暫く軍を止めて置いたが、警戒稍怠ると聞き九月上旬長崎、橫濱等に侵入し、九月半には既に東京に達し、十月下旬より十一月初迄最も奮戰して一日二百人以上の傷病者を出さしめ、東京に於ては八箇所の病院を開設して、我軍の爲に惱まされた傷病兵の救護に努めた。此年は所謂西南戰爭で、人間同志の兵隊の東京に歸る者多く、從つて我軍は陰に之と同船することを得たのと、十月十二日頃東京に暴風雨が起つて諸川の汎濫せるに乘じ井戸水等に分遣隊を派することが出來たので大に便を得た。

明治十二年も亦東京を襲ふたが、我々の手に掛れる者二千二百三十六名、戰歿者千七百九十人にて、六月二十日頃より十一月の初迄繼續したが、大戰爭ではなかつた。此時は日本橋の濱町及び檜物町より神戶に來た者の身體を借りて東京へ乘込んだのであつた。次は明治十五年で我々は主として橫濱より侵入した。卽ち神田の行商人の橫濱に往來する者の夫婦と美土代町に止宿せる橫濱人とを嚮道として侵入したのであつた。

其後明治十九年は我々が日本に於て最も快戰を試みた最後で、殆んど日本の全部を侵して人心を震駭せしめ、東京のみにても七月より十二月迄の間に一萬二千百七十一人を擒にし、內九千八百七十九人を戮した、卽ちこの前年明治十八年に英佛軍が支那を威嚇し澎湖島に據つたが、我軍は支那軍を援けて屢々英佛軍を脅かした。彼等は兵卒の死せる者を長崎に送つて大浦山の墓地に埋葬したが、我々は其船に乘じて長崎に寇したのであつて、日本全國を通じて十五萬五千五百七十餘人を惱ました。

それより十年を隔てゝ明治二十八年日清戰爭の後に淸國より凱旋する軍隊の間に紛れて日本に侵入し東京に到るや急に旗標を押豎して、先づ血祭に上げたるは一名の陸軍少尉であつたが、五月の末より十

二月の半に至るまで奮闘を續け、東京のみにても三千四百二十餘名の戰病者を出さしめた、是が我々の日本に於ける戰爭らしき戰爭の最後にして、東京及び其他の都市が完全なる水道を引き、我々に對する防禦法も漸々巧を加へ、一般に民衆の智識進歩するに從つて我々の戰略に齟齬を來し、明治四十一年竝に大正元年の二回に於ては僅かに斥候を放てるのみにて遂に我軍の威力を振ふに由なく、空しく中途にして軍を引返した。

茲に今度大正五年七月、布哇丸に乘じて遙に比律賓より横濱に寇し、東京其他の諸港より竝び攻めつつあるが目下の所成敗その何れを期し難い。

第二「コレラ」一族の軍容竝武略

我が祖先より我々に至る迄、天竺の本土より兵を出して諸國を征伐し、武勇を輝したことは既に述べた通りである。彼人間に於ても創業より或時代に至る迄は強いが、代を重ぬるに從つて心弛み漸次衰へて來る。然し近代我々の武運衰へたる觀あるは、我々の弱くなつたが爲めにあらずして、敵軍の漸く我が軍狀を審かにし、防備の策が進むだからである敵軍は近代迄我々の何であるか、我々が如何なる軍略を用ゐるかを知らなかつたので、戰爭は極めて容易であつたが、之を知られた爲に事情困難となり來つたので、決して我々の弱くなつたのではない。今を距ること三十四年前、我輩が歐羅巴諸國を侵掠したので、彼等は敵を知るに非ずんば防備の策立ち難しと心付き我等の本體を見顯はさんものと熱心に研究を始め、獨逸政府はコッポと稱する當時賣出しの猛者を擧げて、我軍が盛に戰ひつゝある希臘に送つたが、彼は更に進んで我が大本營所在地たる印度迄も蹈込み來つて盛に我々の偵察を試み我々は遂に彼が爲に其本體を見露はさるゝに至つた、これが抑も我家衰運の濫觴であらうと思ふ。彼は我等が盛に人の腸胃を侵すを見て、我々が人間の腸胃の内に潛入して彼に仇なす者と考へ、從つて我々は糞便、吐瀉物と共に退却すべしとなし、搦手に於て便を抑留し

顯微鏡と稱する淨玻璃の鏡に掛けて、我々を六百倍或は千倍にも引伸ばし、肉眼鮮かに正體を見破つたので、我等も遁るゝに道なく、遂に其本體を明かにされ、是より我々の性質、軍略、我々に對する防禦の策等悉く彼等の研究する所となつたのである。斯く内情を探知せられたる以上、包みても詮なきことなれば自ら一切を語らうと思ふ。

我家の系統に就ては既に述べたる如く、我々は植物系の最も下等にして單一なる種族である。我々の身の長さは極めて小さくして、顯微鏡の力を借りなければ迚も人間の肉眼では見出さるゝ事はない。我々の身體は三日月の如く或は「バナナ」の如く曲つて居る、それは尺蠖の屈するは伸びんが爲なりとの祖先の戒を重んじ、人間を打滅して植物界に歸伏せしめんとの一念を寸時も忘れさせぬ爲でもあらうか。然しこの形が偶々我々發見の名をなさしめたのであつて、我々に取ては大に不利益であつた。我々は他の「ワッセルビブリオ」等に我々の形を爲さしめ、所謂七人の陰武者を作つて敵の目を混亂させやうとしたが、彼等も然るもの、種々の方法に依て我々を鑑別けるやうになつて居る。我々の軍略上最も便とする所は水軍にあるから、身體の尖端に一本の長い尾を有て居る、花王石鹼とでも渾名さるゝ顔形の支那人が豚尾を下げて居ると考へたら大凡想像が出來ようか。此尾を以て我々は魚貫して迅速に水中を溯り行くのである。我々に最も大切なる武器として我は各々腹中に爆裂彈或は毒瓦斯とも云ふべき毒素を懐き、敵の體中に入るや恰も水雷と同じく自分の身を破裂させると同時に此毒を放つて人間を殪すのである。

以上我兵の軍裝竝に武器の概略を述べたが、これより我兵は如何にして斯る微塵よりも小さき體軀を以て千里の道を行き、萬里の波濤を越えて諸國を侵掠し、如何にして人間の體内に乘込み、如何なる戰をなして彼等を戮するかを物語らう。

我々の本國より他國に赴くには、多くは人體に潛

み或は水或は飲食物中に潜匿して行くのであるが、就中人體を借りるのは最も都合が好いのである。その展開竝に散兵の動作は敵に依て種々の方法手段をとるが事實に依てその大體を話さう。例へば支那より日本を侵さんと欲する時は、先づ旅客の腹中に潜みて船に乗込むか或は飲食物を利用して、船中に於て旅客を惱ましつゝ長崎に到着する。その船上に病む者は熾なる吐瀉物を長崎の灣内に投ずる。而かも我輩等は海水中には克く一箇月餘も其生命を保つことが出來る。此灣内に來る所の船頭其他の者は我々の潜むとも知らず海水を以て器物を洗ひ、飲食物を洗つたりするから、我々は之に乘移つて容易に彼等の腹中に飛込み、美事に彼等を病ましめることが出來る。斯くて船頭、漁夫等の病む者益々多きに從つて我々は益々軍勢を増加し、從つて愈々多くの人を病ましめる。彼等の船内に住居する者の時として陸に上ることあらば、我々は忽ち彼等の腹中を辭して便所其他の場所に屯し、機を見て陸上の人間を搏擊する。その病む者は自ら我々の勢を援け、我軍は破竹の勢を以て四方に進擊するのである。又我々は敵の偵察隊を畏れ、人の腹中に潜み旗を捲いて容易に發せず、即ち其人を病ましめずして、陰に諸方に分隊を派遣するやうな戰略を施すことが常である。敵軍は斯の如き人間を保菌者と稱して恐れをなして居るが、兎に角是等の戰略に基づき我等は長崎より門司に達し、是より石炭運送船に搭じて若松を衝き或は陸路中國を掠めて漸次神戸を侵し、大阪に入る大阪は我々の作戰上最も都合好き土地にて、縱橫堀河多きを以て我等得意の水軍を遣りて深く内地に進み陸上を衝くことが出來る。尙ほ淀川を溯つて淀に達し、京都附近を脅かしつゝ陸路を經て他に進軍する。我々は海水のみならず河水中に於ても永く其生を保つことが出來る。殊に溝渠、入江の如く波靜にして水の動搖甚しからざる處は我水師の好根據地である。若し横濱を侵す時は我々は先づ東京通の運送船に乘じて船頭の腹中に入り、直ちに隅田川

を溯つて千葉を侵し、一面には深川の溝渠、隅田川の上流等に船頭を介して水軍を配置せしめ、處々の溝渠に軍を密集し、此溝渠に入來る魚類或は飲食物等に乘じ、或は船頭等を陸上に送つて漸次蔓延する。尚ほ船頭の他我々の屯集する海河の中に住む魚類の腸胃、鰭、鰓等の間に潜んで人間の厨房に入る日本人の好んで生魚を食ふことは我々に取て最も都合好き事である。其他若し人の飲料に供して居る水道水の中に侵入することを得ば一擧にして數萬人を屠ることを得べきも、現今は人間の飲料水に對する警戒甚嚴にして思ふが儘ならぬは遺憾の極みである。尚ほ我々の前進展開の方法には種々あるが、是は他の實戰談の折に觸れて話さうと思ふ。

第三　敵城陷落の光景

我々の身體は生物の中に於て恐らく最も小さいものであらう。此小さい身體を以て大なる人間の體内に突擊して、之を斃すと云ふことに就ては、抑如何なる努力を要し、如何なる危險を冒さねばならぬかと云ふことを敍べなければならぬ。

彼人間は何處に於ても肉眼を以て我々の存在を發見するの明が無い。我々が前段に述べた方法手段に依て人の口中に入るのは容易の業である。元來我々黴菌仲間が人體の城廓に攻入るには各々其進路を異にして居る、例へば「ペスト」軍は主として皮膚大原の一地點を掘鑿して城内に侵入し、結核軍は主として呼吸器道を行進して肺臓を衝き、「チフス」、赤痢及び我々「コレラ」菌軍は口を通じて消化器道を前進するのが常例であつて、我輩の侵入する關門は殆んど口より外には無いのである。若し人間にして口を閉ぢ、飲まず食はず、斷食の方法を取るに於ては我輩等は到底彼等を侵すことは出來ない。然るに彼等人間は口腹の慾に任かせて此の關門の守を怠つて居るから、我々は大手を振つて難なく此處を通過することが出來る、所がこれより更に進んで胃腑に到着すると、此處が我々に取ての一大難關である。敵は食物を消化する爲に此處に鹽酸を含める消化液を

湛へてゐる。これが我々に取ての大禁物で、この酸に逢ふに於ては我々は生命を失はなければならぬのである。然るに若し幸にして人間の胃の働が十分でなく此酸の分泌が非常に少く、或は多量の水を混じたが爲に酸は、我輩等を殺すことの出來ぬ程薄められてあるか或は氷水等を飲みて胃を刺戟し、爲に胃の運動強劇となり或は多量の食物の爲に酸が十分我々の身體に觸るゝ暇もなく胃を脱出し得る如き場合に於ては、我々は無事に此難關を越えて小腸の中に達することが出來る。この小腸の内の物は胃の酸とは全く反對なる「アルカリ」性を帶び、尙ほ我々の糧食に適當なる「ペプトン」等を有する故に、我々は此處に大本營を移して盛に增兵することが出來る然し人間の身體は何處も要塞堅固にして、その健康の場合に於ては、腸の内壁、卽ち粘膜等と稱するものが極めて完全に出來てゐて我々は一歩も此内に蹈込むことが出來ぬ。此内に蹈込むことの出來ぬ以上縱令幾萬の兵ありとも腸の蠕動に依て我々は空しく大便と共に體外に押出されて了はなければならぬ。我輩等が侵入しつゝ病ましむることの出來ぬ此人間が卽ち保菌者と稱せらるゝやつである。然るに人間には案外腸胃の弱い者が多く、我々の侵入に都合好きやう腸加答兒などを起して粘膜に隙間を有つて居ること丁度戸締りのわるい家或は壁薄き土藏のやうなものが多い。そこで身を盜賊に比するは我等の私に自ら恥る所であるが、我々は彼等と同じく腸壁の戸締の惡い處から其内に忍入り、此處に盛に繁殖し、自ら爆發すると共に、體内より人間を病ませ或は之を殺すべき毒を放つのである。元來人間の腸は殺人用の凶器を取込むで血の内に配るに都合好く出來て居るのであるから、我々の毒も此處より吸收されて、「モルヒ子」や其他の毒を飲むだ時のやうに人間を病氣にするのである。

次に我々が意の如く人體に侵入し、首尾好く敵壘を破つた時には敵の光景如何と云ふに、敵の兵力如何と、我々の武器の利鈍如何に依て其光景は種々で

ある。

第一には我々が侵入するも毫も彼等を病ましむること能はずして空しく體外に排出され、他の人間に向つて再擧を圖るの止むを得ざるに立至ることがある。是が前に云ふた保菌者と稱する人間である。

第二に彼等は我輩等の侵襲を蒙むるも、數日間輕き下痢を發し、醫者と稱する彼等の探偵すら普通の腸加答兒軍の侵襲位に輕く看做して仕舞ふ位のことがある。特に小兒などに此類が多く、所謂消化不良など、云ふて濟むで仕舞ふことが尠なくない。是等の場合は彼等自身に取つては幸であるが、我々が油斷に乘じて其周圍の者を襲撃するには最も好都合である。

第三には我々の攻撃その功を奏するや否や忽ち劇しく下痢を來し或は吐き、一時最も慘狀を呈するが一二日にして急に恢復し終ることがある。我々は敵國侵入の始め、十分に廣く兵を配置する迄は偵察されぬやうに斯る輕装せる前衛尖兵を用ゐることが多い。

第四に我々が十分戰鬪準備を整へ、猛然として威力を振ふ場合に於ては僅々五六時間乃至一二日にして人を斃すことが出來る。乃ち彼は急に腹部に膨滿の感を覺え、腹痛も甚しからずして多量の下痢を始める。最初は大便の色を帶びてゐるが、次第に白い米の泔汁か極淡い重湯のやうな色になる。それを便器の中に置くと上清は淡く、下に煮熟した米のやうなものが沈澱む。是は我々が破壞した腸壁の壞物である。又彼等は上の方に吐く、此の吐瀉の勢は極めて劇しく、全身の水分を絞りに絞つて雙方から濺り落すやうで、之と共に排出される我々は目が廻るやうである。人間が若し此大便中の白い物を採て顯微鏡下に照すならば我軍の勇士數萬騎鑣を揃へて其中に活動するのを見るであらう。之を見た者は、恰も水中を鰯等の魚類が突貫して泝るやうだと形容して居る。斯の如くにして總身の水を失つた病者は見るが中に頬は瘦せ、眼は凹み、鼻は鋭くなり、豐

滿なりし手も皺寄りて老人の如く、皮膚は彈力を失つて撮み上るも徐に歸る力なく、心臟は我が謀の爲に甚しく侵され、脈は殆んど觸るべからず、呼吸はせはしく、凹みたる眼の周圍、唇、手足は暗紫色となり、全身は冷えて冰の如く、相好忽ち變じて我等と雖も、先に口より入るに方つて見たりし人とは全く別人かと思はるゝやうである。

而して彼の聲は嗄れ、口は渴して水を呼べども之を口にするや直ちに吐し、四肢の筋肉は攣縮して痛甚しく、身の內熱を覺え、輾轉反側するの狀、敵ながらも惻隱の情を起さゞるを得ない。元來我が目的とする所は彼等の戰鬪力を失はしめて其兵力を損するのに在て、之を殺戮するは眞の目的ではない。故に助ける望があると思ふてゐる中に、醫師は種々の治療法を施し、病者之に應ずる力ある時は、絕えたる脈は再び現はれ、紫の脣は紅の色を呈し、手足溫まり、昏憒せる精神は復び明かとなり來る、之を初として吐瀉止み漸次治癒に赴く者もあり、或は百方手を盡すも復救ふ能はず或は一度輕快するも「コレラチホイド」など稱する餘病の爲に再び命を失ふ者もある。

以上は我々の敵軍攻擊及び敵城陷落の光景の一端である。我々は止むを得ずして斯の如き慘劇を演ずるのであるが、敵の生殘の勇士に對して與ふる所の任俠的好意に至ては後に改めて述べようと思ふ。

第四　敵軍の防禦戰略

扨これまで話したのは、「コレラ」家の武勳並に戰略の大體である。然るに玆に敵將コッホが彼の顯微鏡を以て我が忍術を破り、我々を見顯はす方法を發見して以來、彼等宗徒の面々は種々の手段を講じて我軍の性能、作戰計畫より、平時に於ける生活の狀態までも探究して防備の方法を策するのみか、進んで我が一門を亡ぼさむと巧むで居る。斯くて彼等の計略は着々として步を進むるに從ひ、我々は常に惡戰苦鬪を爲さゞるべからざるの狀勢となり、今は往昔の如き花々しき戰爭も出來かぬるのみならず、遂

には彼人間の爲に、我一族滅亡の悲境に陷らむかと竊に憂慮して居る次第である。

然りながら人間には案外弱點多く、猶ほ我々が乘ずべき隙は殘つて居る。我々が目下戰術の主眼とする所は專ら此弱點に附入るにあるが、彼等は實に種々の弱點を有て居る。第一に彼等は自分で自分を知らぬ。生るれば死ぬるのは人間の定命である。然るに彼等は日々他人の死ぬのを見ながら自分の死ぬのを忘れて居る。他人に來る不幸は自らにも亦來り得べき筈のものである。然るに自分だけには來ぬものゝ如く考へて、萬事に就て用心を缺いて居る。第二に我々の最も都合の好いのは彼等が口腹の慾である。彼等は不思議にも惡いと言はるゝ物は一層食ひたくなる。然れば惡いとは思ひつゝも其場に臨んでは何とか理窟をつけ、己を欺いて之を口にする耳を覆ふて鈴を振るは敢て無智の徒ばかりではない我々が飮食物に乘じて彼等の腹中に入込むのは此の隙間が最勝第一の道である。彼等の自惚と此の口腹の慾とのあらん限りは、「コレラ」家の運命もさばかり悲觀するにも及ぶまい。コッホの如き猛將再び現はれて、此上にも凶暴なる軍略を弄するにあらざる以上我々は花々しからずとも猶ほ人間を脅かすに足るの勇氣は充分にある。

次に我々が近世の人間征伐に於ける苦心と、時々蒙むる所の惡戰苦鬪の狀況を物語らう。

(二)金城鐵壁(腸胃の健康)

我々の人間に對する作戰計畫及び慣用の戰術等は既に述べたる如くである。然るに近來人間の用心堅固にして、我軍は常に惡戰苦鬪の有樣である。第一人間が、必ず我等の通過すべき口の關門に嚴重なる守則を設けて我等を誰何するのにも困るが、苦心の結果さしも怖ろしき胃の鹽酸湖を徒渉して、漸く目指す腸内に殺到して見ると、さて腸の城壁堅固にして、內より之を破るべくもあらず、空しく後門より退却せねばならぬ場合がある、所謂骨折損にして馬鹿々々しき事の限りである。此の呼吸を曉つた人間

共は、我軍一度國内に侵入せりと聞くや、身に腹巻を着け、一方感冒を用心すると共に飲食物の注意等その外廓の守備いとも嚴重である。然し猶ほ與し易き無謀の人間は隋分澤山ある。我輩の襲撃を怖れて盛に警戒を叫びつゝある際でも、東京市中を巡察して見ると、氷屋、駄食物屋等には紺の羽織に贋パナマと云ふ扮裝で、束髪の妻君と共に氷赤豆などに舌鼓を打てゐる連中を發見することが決して少なくない、是等を見れば聊か心を安ずるに足りる。試みに我々が擒にした連中を、病院に見舞ふて、其病に罹つた動機を聞て見るが宜い。單に我輩が侵入したばかりでなく、我輩等の攻撃に自ら加勢した形跡が歴々として明かである。例へば馬肉を食ふて燒酎を飲んだとか、氷水と同時に西瓜を食ふたとか、煠赤豆と氷を食ふたとか、斯う云ふ輩は、多くは腸加答兒を起して腸壁を傷め、自ら我輩等の爲に侵入の門戸を開いて呉れたのである。實は我輩等は既に此處に到つて何處か闖入すべき隙もがなと窺覘がつてゐたのである。彼等が斯かる亂暴をせねば我等は空しく體外に押出されて了ふのであつた、又亂暴と云ふのではなく、誤つた養生の爲に災を招た者もある。例へば我輩等を「アルコホル」や日本酒の中に投ずるときは忽ち枯れてしまふと云ふ事を聞き、嗚呼がましくも我等を殺し或は防禦するの目的を以て「アルコホル」や酒を盛に飲む者がある。然し如何なる人間でも酒樽ならざる以上、胃の中に絶えず我々を殺すだけの酒を貯へて置くことは出來まい。のみならず是が爲に却て腸胃を傷めて我輩に侵入の門戸を開いて呉れる場合もある。又胃中の鹽酸は我々を殺すと云ふことを聞き、鹽酸「リモナーデ」などを濫用して却て下痢を起す者もある。尚ほ誤つて生兵法で、我我の侵入に便宜を與ふる種々の場合もあるが、それはこれ迄述べた場合と場合が違ふから後に至て改めて話をする。

(二)「コレラ」水師の戰術(水の警戒)

海水及河水　我々が一國土を廣く蹂躙せんが爲に

は常に海軍を編制し、海水及び河水を利用して水師を遣ることは既に述べた通りである。故に最も早く我軍の捕擄となるものは船頭及び其家族にして、我が先陣の襲擊する所は、多くは水に關係ある人間である。例へば我々が東京の河水其他を利用し、病める船頭等を水先案內として無數の水雷を敷設した事は略新聞紙等の摘發する所となつたから、敢て茲に自ら喋々せぬ。又此の海水、河水より如何なる道途を經て陸戰隊を派遣するかと云ふ事も我輩は既に之を漏告して居るが、人間は我々の此軍略に對して種種なる防禦法を講ずるのである。例へば港々に檢疫法なるものを設けて、我輩等の水路を偵察し、水雷敷設の動作を阻害し、若し又東京に入らんとすれば深川或は隅田川の河口、其他船舶の通ずる溝渠の要所に檢疫船なる哨艦を設けて我輩等を誰何し、又船內の者共に我輩等の潛伏せる水を用ゐしめぬが爲に其水に石油を撒くと云ふやうな惡辣な手段を施すこともある。又市役所は船內の人間の爲に特に數十個所に彼等專門用の水道を作つて淸水を給して居る。斯く種々の方法を以て我が海軍を禦がんと努めて居るが、然し猶ほ我々を懼るゝ事を知らざる無謀の豪傑も人間には隨分多い。我々が既に水中に潛み或は水雷艇或は浮留水雷を放つべき戰鬪準備をなしつゝある事を聞知しながら、尙ほ其處に釣絲を垂るゝ太公望もあれば、盛に游泳場を開いて警察の差止めを喰ふものもあり、場合に依ては野菜を洗ふもの、盤臺を洗ふ者共も少くない。殊に船頭などに至ては此の如き事を何共思はぬ者が多いが、又彼等の生活上止むを得ずして斯る危險を冒す者のあるは氣の毒である。若し彼等をして止むを得ず危險を冒さしむるものとすれば、其れは防禦軍司令部の失態と謂はなければならぬ。

○○○水道の水　昔の水道は我輩等の大爆發を試みるに最も都合好いのであつたが、今日の水道に至ては殆んど完全であるから、我等の奇計を施すべき所でないと斷念めて近寄らぬことにして居る。然し彼の獨

逸のハンブルグ或はペーテルスブルグ等に於て嘗て我々が猛威を振ひし如く、若し水道にして不完全の點あらば、我等は直ちに之に乘ぜんと日夜猶ほ偵察を怠らぬのである。然れば水道の守備兵共は、我々の出沒する際には水源地の警戒を嚴にし、淨水池等は參觀者其他一切人の出入を禁じ、醫師を置て職員其他の健康診斷を行ひ或は糞便檢査を勵行し或は豫防注射を施す等警戒をさ〳〵怠なく、今に一點の隙をも見出すことが出來ぬ。斯る上にも尙ほ用心深き者は水道の水をも煮沸し、然らざるものは用ゐぬやうにして居る樣子である。

然し貧民窟や其他の所に於て使用する共用水道なるものは時々我輩等に便宜を與へて吳れる。彼等貧民は水道栓より水を汲むのみならず、直に其傍に於て汚物の洗濯を試みる。此處に赤痢菌の密集部隊が駐屯して居る小兒の襁褓や、我輩等の大軍團が勢揃をして居る病人の寢卷などを洗つて其水を地上にこぼす。他の者は我々が此處に馳驅してゐるとも知らず其處に「バケツ」を置き、我々の蟠附して居る水栓を捩つて水を汲んで歸る。其手より、其水より我我は人體に飛込むことが出來る。差配人などゝ稱する者は、家賃を取立てる事は知つて居るが、是等の點に注意する者は一人もない。

井水　極めて完全なる井戸の水は、我々と雖も之を軍略上に應用することは困難であるが、その構造の充分でない井戸の水は我々の好んで軍隊輸送に利用する所のものである。我々が井水中に侵入する手段は種々ある。先づ我々の宿營地たる便所より工兵の一隊を先頭として粗鬆き土壤を潛つて井水に達することがあり、或は敵兵の手に附着し、其手を以て手繰らるゝ釣瓶繩を傳つて飛込むこともある。特に我々の屢〻試みるのは井戸邊の洗濯に乘じて侵入することである。嘗て我々の同族たる「チフス」等が行つた同手段の實例を擧ぐれば、神田の淡路町に於て「チフス」の擒となつた者の襁褓を其家の下婢が井戸邊で洗つた時、「チフス」兵等は其の不完全なる井

戸側を傳はつて洗濯水と共に侵入したのみならず、下婢が洗つた縫襟を井戸側に懸けたるを幸、縫襟諸共井底に沈み、忽ちにして附近十數軒の人々を病ましめたことがある。我々も此の手段を採つたことが一再に止まらず、地方等に於ては數知れぬ程である。

（三）「コレラ」軍乘用の馬匹（飲食物の注意）

我輩は屢々揚言せる如く、天授の忍術を心得て居る。彼の探海燈の如き顯微鏡を差附られぬ限りは人目に掛る憂もなく飲食物の逸物に打跨り口と呼ばるゝ人體の追手門より堂々として乘込むことが出來る。海の水や、河の水に隱れては、人間の大好物たる魚類を馬となし、之に打乘つて陸上に馳上る。馬諸共燒たり、煮たりされては固よりたまらぬが、人間殊に此國の人間は生のまゝで食ふことを好むから御し易い。縱令燒かるゝも、我々はこの魚馬の身の中深く隱れて火炙の難を免るゝことがある。彼等は又我我が酸に逢ふときは數分間にて殺されることを聞知り殘忍にも我が愛馬たる魚を屠り、之に三盃酢を打注けて食ふのである。併し我々は此時早く馬腹に身を隱して暫時の酢攻に堪ふることを知らぬ。これに依て面白き手柄をした事があつた。そは去ぬる明治四十一年の戰のことゝ覺ゆるが、我が一隊は手馴の鰯に打乘つて、とある商家に打入つた。家族の者共は我等の姿こそ見えね、當時嚌に立てる江戸紫、我が軍馬の毛色に依て聊か畏をなし悉く煮て喰ふた。それが爲に我が手の者共も多くは鍋中合戰の劍空しく相果てた。我輩も亦到底この運命免るべうもあらずと觀念の臍を固めたが、此家の主人と聞えしは一杯いける奴、酒の肴、酢の物こそござんなれと我が打跨つたるとも知らず、やをら三枚におろして三盃酢を打注けた。こはかなはじと思ひたれども、馬腹に身を隱し、息を潛めて在る程に、この主人、箸をおつ取るよと見る間に、舌皷を打ちつゝ胃の內へ投入れ、助太刀に立つたる小童の口へも功名ぶりに其一片を含ませた、是に至て我輩等は急に鬨を作つて煮殺されたる同志の讐思ひ知れとばかりに、彼

等の腹の中に獅子奮迅の勢をなして親子諸共に打取つた。斯んな手柄は此他に幾らもある。生半三盃酢などの生兵法を知らねば、我々も共に煮殺された所であつた。

又我々に加勢をしてくれるのは魚屋といふ馬販である。人間の中でも嚴酷しいやつは、我々が屢〻魚に騎つて來ると云ふて仲間中に警告し、魚屋、料理屋は、これが爲に商賣が少くなる。不平を鳴らして世話役の所へ押掛ける、世話役は恐れて曖昧な事を云ふ。口腹の餓鬼共は復た氣を弛ませて食ふ。我輩等は之をしほにして跋扈してやる。尤も我輩とても悉く何れの魚をも馬に使ふわけではない、百尾中の一、千頭中の一である。併しこの一騎に乘込まれ蹴倒された當の人間に取つては、千中の一つであらうが萬中の一つであらうが同じ事である。我々智者から言はすれば、凡そ、我々が隱れて居る海水や河水に緣のあるものは魚でも野菜でも恐るべきが當然である。人間が我々の正體を發見せざりし昔、安政の頃すら、醫者や警視廳などが何とも云はないでも魚が怖い、鰯が怖いと氣がついて、我輩等の武勇を讃歎した替歌などの中にも『江戸紫の細姿、一口たべて寢た夜さに、このてがほしたおなかをば、癪さちがつてその痛さ、少將さんでなけれども、百度通ふ深草も、これも何故後架へと、暫の中にそのやつれ』などゝ云ふて居るではないか。蓋し江戸紫の細姿とは鰯をほめた渾名である。此の如く昔の人間の方がなか〳〵我々に取て油斷の出來ぬ點もあつた。又面白いのは役人などゝ稱するもの〻中によくある所謂豪傑で、他人が怖いと云ふと強がつて刺身を食ふ、酢の物を食ふ。我々は屢〻此種類の儲物に逢着せる又中には海の魚が怖いと云ふて、我々が最盛に駐屯して居る河の魚を平氣で食ふ奴がある。此等の一方より外に見えぬ徒輩も亦我々の乘ずべきものである。此間も音羽の邊で我々が乘て居るとも知らず、生土鯰を手料理して食ふたものがあつて、見事に我輩の蹄にかゝつた。併し魚を騎馬としての戰術

も度重なればさしも食意地の張れる愚痴の人間共も何時しか玆に氣がついて、近來は一切煮たものでなければ食はぬと云ふやうになつて來た。何とか一工夫せねばなるまいと思ふ。此間も小梅で菓子職人の親子二人を攻擊して、彼等の造つた菓子の中に潛むでやつたが、乾かぬ中に何處ぞへ攻込めばよいが、さて何うなつたか未だに消息を聞かぬ。一體我々は水氣なしにはゐたゝまらぬ、乾かされては到底生きてゐる譯にはいかぬ、これは常に我々の難澁する所で水氣さえあるものならば、縱令菓子の中なりとも我我は容易に死ぬるものではない。人間輩は此の如き事迄も我々の消息を探索して居る。

我々の如き簡易生活を貴ぶものから見れば、彼れ人間共の食意地の張れることは只呆れる外はない。何とか其處に理窟をつけて食ふことを考へる。彼等は我々の發展を阻害せむが爲に食物をやかましく言ひながら、上等の料理屋ならば大丈夫だと例の理窟をつけて飲み且つ食ふのである。何ぞ計らむ、見掛けは上等だが、我輩等が蠅と云ふ生きた飛行機に乘て他所一倍その臺所を襲擊して盛に無聲の爆彈を投下しつゝあるのである。先日も我が敵たる警視廳の役人と稱する者が來て、その案外なるに一驚を喫し我が航空隊の驅逐を勸告して居つたが、横着にして無頓着なる彼等は一時その言に從ふとても到底長くは續くまいと我々は安心して居る。

此の如く我々が、如何かして人間を滅さんものと苦心を凝して居るが、人間共は猜忌の眼を放つて我我の行手〱を妨げやうとして居る。併しまだ〱隙間は幾らもある。例へば魚はなるほど煮て食ふことを知つて居るが、我輩等が魚の馬を乘捨てゝ包丁俎、流しの隅と身を隱して居ることは知るまい。併し稀には魚屋より切身を直接鍋の中に受取り、直に味をつけて猛火にかけて我々を煮殺すと云ふやうな奸智に長けたものもある。更に又魚のみならず果物や野菜を一萬倍の鹽酸水或は熱湯で洗つて食ふやうな飽まで拔目なき小癪なもの共があるから、我々

「コレラ」兵たるもの丶苦心は並大抵のものではない人間中にも時々露探、獨探など丶云ふ奴が出沒するから、我輩等も彼等類似の人間を雇ふて魚の盤臺や野菜を河水で洗はせたりするやうな事もせねばならぬ。警察の目を盜むで、我々が今や戰鬪準備中の海岸や河邊に來て魚釣などをする太公望は眞にこれ我々の味方、人間の裏切をする者と謂ふべきである。試みに傳染病院に行て彼等の一々を尋ねて見るがよい十中八九は水から招いで我々の術中に陷つたものである。我々が漸く彼等の腹中には潛めるもの丶勝敗の程も未だ氣遣はしく、如何はせんと案じ居る中に自ら惡物食ひをして、我々が目差す本丸に打入るべき胃腸の石垣を打崩したるものか、さなくば我々を侮り好んで城內に引入れたものである。日本の者共は支那人、支那人と馬鹿にして居るが、我々に取つては彼支那人こそ手におへぬ一族である。我々の橫濱を攻擊したことは一再に止まらぬが、彼の豚に譬へられた不潔の支那人は遂にこれを襲ふに由なかつたゞこれ彼等は一切生な物を食はぬ我々を皆煮殺し、或は油責めにしなければ決して口に入れぬからである。彼等の本國に於て無數にジャンクに住むでゐる奴等を虐めるやうな譯にはゆかぬ。我々は水中に潛むも一度煮らる丶や否や殺されねばならぬ。一萬倍といふ味すらも分らぬ程の鹽酸水や硫酸水にても生命を奪はれる。後來これに耐へ得べき甲冑樣のものにても製らねばなるまいと苦慮焦心の最中である。

(四)「コレラ」爆彈の手渡(食品の贈答)

我々が人間を不意打するに極めて便利な一手段がある。それは彼等をして互に我々の爆彈を手渡しさせる事である。卽ち彼等は贈答と稱して種々の物をやりとりするが、就中飮食物の贈答の盛なるは世界廣しと雖、恐らくこの日本の如き處はあるまい、これ我々の爲めには誠に嘉すべき惡癖であつて、我々はこれを利用して我軍の爆彈を彼等相互の間に持運ばせるのである。我輩「コレラ」族に於ては銘々生存に必要であるか又は嗜好を滿足させるだけに飮み且

つ食ひ、それ以外他人に强ひらるゝことなく亦他人を强ふることがない。それ故我々は小さくとも、曲てゐても斯く勇猛に戰ふことが出來るのである。然るに彼れ日本人等は他人に物を贈て、强ひて食はしむることを禮とし、自らの小兒には間食を戒めながら、美事に裝ふた食物を人に贈て他人の子の間食心を誘發せしめ、その消化器のみか、その心までも賊はしめて居る甚しきに至ては我々の親族たる黴の生えた物までも人に贈り恬として顧みない。日本人は何つの世にか菓子屋、其他の食品店に大なる負債をなして今猶ほそれが償却し切れぬのであらう。これが偶〻我々の爆彈運搬人夫たらしむるに最も都合が好いのである。殊に昨今彼岸の如き時には彼等は最も好むで我が役夫となる。彼等は我々が食物の中に潜むなどゝ盛に口では唱へながら、熨斗水引にて飾立て平然として之を人に贈る、而かも彼等は我々が其中に潜で居るか否やを見分くるの明とてはないのである。我々社會の道德から論ずれば他に對して忠なる者と謂ふべきであらうか。彼等は又我々が人の腸内に潜むで居ると唱へる。これは彼等の觀破せる通りであるが、我輩等が將に其腸内に於て一大爆發を試みむとしてゐる矢前に、其贈物を食ふたならば實際その中には爆彈なかりしとするも、その家族は之を以て爆彈そのものとし、少くともその贈物を以て導火線であつたとして贈主を怨むに違ない我等「コレラ」族の聰明を以て見れば、これ果して智と謂ふべき乎。彼等の無智と不仁とは我等の利とする所である。我等が日本人のこの好習慣を利用して實戰上に大勝を博した一例を擧げて見よう。頃は明治四十一年我軍橫濱に寇し、運漕船に乘じて旗鼓堂堂隅田川を泝り、千葉の沿岸を掠め、逆に東京を衝いた時のことである。我々の一部隊は千葉の浦安といふ處の一船夫の腹中に忍入り、極めて急劇に彼を斃したるに、醫者はこれを腦膜炎と診た。その家族が葬式を營む折しも、東京は神田の材木屋に下女となつて居る彼の妹が來合はせた。我々はこれ幸

と彼の持歸る重箱を彈藥箱となし、陸戰隊を東京に向けて派遣した。この重箱の内には我輩等の大好物たる寒天の如き物が有つて、東京に到著する迄には我々の同勢愈その數を增し、勇氣自ら百倍した。件の下女は右の重箱を開き、先づ朋輩數人に之を食はせた。此時は我黨思はず快哉を叫んだ。その愉快さは今でも忘れえぬとは、其時に參加した我が老兵の談であるが、計略圖に中つて其中の二名は猛烈なる病を起し、傳染病院に送られ、他の八名は隔離所に送られた。隔離所では大便を採つて我々の潛伏し居るや否やを探索し初め、到頭六人の腹中に潛でゐたのを發見されたは殘念至極である。他の二人は惡運强く重箱に箸をつけぬので我々の侵入しようもなかつた。斯の如く我が計略は略ぼ意圖の如くに進捗したのに惜しいかな、中途隔離所の難に逢ふて再び起つ能はず、廣く猛威を逞しうすることが出來ずに終つた。之に反して一方浦安に於ては奇計縱横、その葬式に集れる者數十人を病ましむる事が出來た。我が「コレラ」軍の參謀本部に於ては今日猶ほこの日本人の食品贈答を利用することを重要の戰略とし、時時これを試むる主義を採つて居る。これは日本人には内々の話である。

（五）敵兵站部の襲擊（臺所の注意）

我輩等の戰爭で、兵力を損すること少くして最も奇功を奏するのは、先輩が嘗て獨逸國ハンブルグ攻めの砌に行つた通り、水道の內に兵を送ることである。由井正雪が江戶中に地雷火を仕掛けようとしたのも同筆法であるが、その小規模なるは臺所に伏兵を置くにある。工場、寄宿舍、大旅館等に於ては案外の好成績を擧げることが出來る。それ臺所は彼敵軍の兵站部であつて、一度この中に忍込みさへすれば一家族を殲滅することは容易の業である。然れば我我は、あらゆる手段を以て此處に忍入ることに努むるのである。我々が臺所戰に於て第一に用ゐる軍器は蠅と稱する飛行機である。これは敵軍も充分に知つて居つて種々の防禦法を試みて居る。例へば蠅帳

と捕蠅器とを兼用し、これと同時に塵芥溜に「クレシン」又は石油等を撒布する。此の如き悪辣な妨害に逢ふては我が飛行機たる蠅は役に立たなくなる。我々から考へると、元來塵芥溜なるものは決して外に漏れぬやう、その外部だけは出來得るだけ清潔に保ち、又臺所の傍に置くべきものとは考へぬが、只便宜と云ふ事のみを考へる橫着な人間共は、これを遠方に置くことをせぬ。これ我が軍用飛行機の製造所竝に格納庫として便を得る所以である。

蠅の飛行機に次で屢々我軍の使用するものは鼠と云ふ軍用自働車である。人間が戰爭に火牛を用ゐ或は象などを使つたのは、我々祖先の故智に倣つたものであらう。人間は「ペスト」戰の場合には鼠をわい〳〵言ふが、我々「コレラ」軍と對陣するときには、この軍用自働車に氣がつかぬ。例へば我々は神田川を泝る艀頭等の腹中に隱れて上流に到る頃、彼の吐瀉物と共に水中に跳込み、河岸に待合はせたる鼠自働車に飛乘り夜陰に乘じて下水を越え臺所へと乘著け此處彼處と小哨又は獨立下士哨を配置し、敵の行動を監視して居る。併し時には流下の警戒嚴重にして輕快なる我が活自働車も乘入るゝに由なく、空しく引返さねばならぬこともあり、或は首尾好く乘入るも鐵條網に引掛かり、或は虎猫の襲ふ所となり、我は「ペスト」の身代りとして交番所の被損自働車格納庫内に敢なき最後を遂ぐることもある。

魚や其他の飮食物を乘馬として臺所に闖入する方法は、人間が我々に對する作戰計劃の進步に依て稍陳腐に屬してゐるが、玆に尙ほ一つ苦肉の策がある。それは敵の兵站部長阿爨殿に取入り、所謂保菌者たらしめて皆の者に曉られぬやう、何時とはなしに臺所を荒すのである。併し近來は兵站司令官たる奥樣連の衞生思想が大に進みしのみならず、阿爨殿に任官する者も大抵小學校位は經て來た者で、昔の山出しとは大にその趣を異にしてゐるから、本來細君とは一致すべからざる性質を有つてゐて、我々との戰爭に於ては當然我々に內應すべき筈なるに、近來は

兩官相和協して抵抗するので是亦大に困難を感ずるやうになつた。この阿さんどんなる者は、妻君の軍事教育を受くるのみならず、世の新聞雜誌などが頻に我々に敵對する方法を敎へて惡智慧をつける。又敵軍の奸智に長けたるや、幻燈、活動寫眞、衛生展覽會、さては演劇などゝ興味豐かに彼等阿さんどんを誘かして我々の計劃を素破抜き、彼等に守戰の法を敎込む如きことをして居る。彼の學者輩の講釋などは敢て恐るゝに足らぬが、この衛生劇の如きは我々に取つて實に容易ならざる惡戲と謂はなければならぬ。當然我々に內應し、裏切すべき筈の愚痴蒙昧の人間共までが、之を見て忽ち我等に刄を逆にして防禦の態度を示すやうになるは甚以て怪しからぬ話である。要するに、臺所戰爭に於て我々に對する彼等の敵對行動は、元來食物に對して異常の執著心を有する筈の阿さんどん迄が、忽ち千代秋の政岡を氣取りて、自分の拵へた物の外は主人にも薦めず、自分等も一切口にせず、我輩等の襲擊を恐れて

蠅、鼠等の侵入を防ぐこと前述の如くである。又我輩等が日光竝に乾燥に耐へぬことを知つて務めて臺所を明くし、水道の水、或は熱湯、甚しきに至ては五千倍乃至一萬倍の鹽酸水を用ゐて流しを洗ひ、流下には「クレシン」を撒布し、更に神經質の者に至ては一萬倍の鹽酸水を桶に貯へて野菜類等を洗ひ、殆ど我輩等をして侵入の餘地なからしむるに至つたしかし彼等にも往々所謂氣が利いて間の拔けた處がある。乃ち彼等は我々を殺さむが爲に水を煮沸し、飮食物を煮、牛乳を消毒する、斯の如くにして能事終れりとして油斷をして居ることがある。我々はこの油斷に乘じて、その煮たる水、調理せる食物、消毒したる牛乳の內に、蠅其他の物に依て飛込むのである。この一度煮沸したる水、消毒したる牛乳の中には、若し入ることを得ば、生の水生の牛乳の中よりも我々は長く生存することが出來るのである。殊に汲置きの水などは我々の潛伏するに最も適當であるが都會に於ては水道が出來、地方に於ても餘り汲置

きをせねやうになつた。器物は乾燥すると同時に我我は殺されるのであるから、餘り我々の良き隱家ではない。其上熱湯中に浸され、蠅を防ぎ清潔なる棚の中に置いて我々の侵入を防ぐなど警戒をさく〜鐵條網にも勝つて居る。適々拭巾の中に陣取るも、彼等は楠公の故智に倣つて熱湯を浴せかけ或は子供の襁褓同然、金網の上などで我々を乾殺するのである。

（六）「コレラ」軍遊擊隊（旅行者の注意）

前にも述べた通り、昔は我々が人間を侵すのを見て細狐が依憑つて歩くものと考へた如く、實際我々は遊擊隊を放つて彼等を狙擊する。その遊擊隊は直に人間を乘物として此より彼へと轉戰するのである。此度も最初布哇丸の人間に乘移つて横濱に遊擊し、横濱に來た船頭に乘移つて行德邊を遊擊した。最も愉快であつたのは我々の潜むとも知らず道後の溫泉から大阪の邊を旅した東京在千駄ケ谷のお婆さんに乘移て千駄ケ谷に來り、更に神田區の知人の處まで騎出して東京の中央に爆發してやつた事である。

東京邊の人間は、我々の潜伏地に誘出して之に乘移る機會は幾らでもある。我々の潜伏地から東京等に乘込むには要所々々で見張を付けて喰止めるから多少妨害はされるが、彼等が我々の潜伏地に來ることは何等妨げるものはない。然れば陽氣な人間は我輩等の術中に陥るものも少なくない。然し旅行する者も種々注意をして我々の辣腕を免るゝ者が多くなつたが、案外に旅館と云ふやつは人間中間に對して不忠實である。眞に衛生を守つて旅客を安心せしめ其の忠實を以て客を引くと云ふやうな手段をとるものは殆んど無いと云ふても可い。

（七）「コレラ」軍の雇兵（雇人の注意）

倘ほ我々は敵の雇人を以て直に吾が雇兵とし、不意に家庭に飛込むこと彼の千駄ケ谷のお婆さんに施したと同一手段に出づることがある。前に言へる如く細君と阿爨とが和衷協同の實を擧げて、我輩等をして侵入の餘地なからしむるに際しては、他の我々

仲間を援兵として阿爨を病氣に罹らしめ或は人間の敵たる天魔波旬の力を頼むで主從の間をさき、他の下婢を雇ふの止むを得ざるに至らしめ、之に乘じて其腹中に隱れて家庭に闖入するのである。此の如きは只稀に行ふ所の苦肉の策であるが、往々奇效を奏することがある。

是は我々仲間の發疹「チフス」の手柄話であるが、發疹「チフス」の一隊が盛に淺草、本所等の貧民窟に跋扈してゐた頃、不思議にも麴町の眞中に一名の患者が發生た。而して其病人は病院に送られ、家の人々は隔離所に隔離された、所が氣の毒なことに其病人は三四日前より其家に厄介になつた知人であつて長く發疹「チフス」の密集する處に居つた者であつたこれが丁度此家の主人の洋行せむとする矢前で、既に船の切符までも買てあつたが、隔離所に隔離された爲に十分旅行の準備も出來ず、夕方家に歸つて翌日漸く船に乘つたと云ふ始末であつた。然し近來人間も横著になつて、我々の荒廻つて居る間は、縱令手不足になつても、もう一二箇月の辛抱であると云ふて容易に新に人を雇入れぬやうになり、止むを得ざる時は確實と思ふ處に五日間置き、甚しきは檢便した上でなければ雇入れぬと云ふやうな頑固な者もあり、然らざるも雇入れる際に其の住所、來歷を嚴重に問糺すやうになつて來て、我々は往々流星光底長蛇を逸するの感に堪へぬことがある。

(八)敵襲報告、捕虜となれる「コレラ」兵の運命(屆出、病院、隔離所)

我々の戰爭に於て最も忌む所のものは敵軍の偵察隊である。彼等は我々が猛威を振ふて人間共を疾ませ或は之を屠ると同時に、忽ち兵力を數百倍にし四方に向つて大進擊を試みむとするに際し、小賢しくも偵察に努め、一方衞生隊を派して、我々の手に罹れるものありと見るや、直ちに之を傳染病院に送つて極力治療を加へ、一面消毒藥と稱する毒瓦斯或は「ダムダム」彈にも等しき凶惡なる武器を用ゐて我輩等を鏖殺せむとするのである。往時人間の我々に

對する知識の幼稚なりし頃には、我々は間諜を放つて、傳染病院に送らるゝと血を取らるゝと謠言せしめ、或は毒を與へて殺さるゝなどと流言らして巧に衆愚を誑らかし、病を隱蔽せしめ、其間に迅速に目的を遂したものであるが、近來に至ては少しく我が斥候の爲に擦過銃傷を負ふ者があつても、直ちに敵襲と叫んで之を本營に報告するので、此の詭計を用ゐることが困難になつた。此の所謂屆出の爲に、我我の大々的作戰計劃に齟齬を來し、空しく彼等の爲に離立てらるゝ有樣は實に慘澹なものである。敗軍の將兵を談ぜずではあるが、抑も彼等が用ゐて我等を破る所の戰略の如何なるものであるか、實戰に就て少しく素破拔いて見ようと思ふ。先づ我輩等の一軍が本所方面の木賃宿に闖入し、一擧にして百餘人を全滅せしめんと企てた。我等の考にては此の城塞こそ智識の低級者、烏合の衆の立籠れる所であり城主は小慾にして大慾を知らぬ奴なれば、所謂隱蔽の愚策を弄し、我輩等をして恣に勝利を得せしめるに相違ないと期待し、其一人を槍玉に上ぐるや、吐瀉物と共に突喊を試みたが、豈計らむや、此の木賃城の城主なる者は、周圍の者を制して我々を近附かしめず直ちに我々の強敵たる醫者と警察官との應援を求めて我々に立向はしめた。彼等は敏捷にも、後備として腹中に止まつたる我軍兵諸共件の病人を馬車に乘せて傳染病院に送つた。我々は尙ほ遁れ出づべき餘地もやあると病院迄到着して見たが、到着すると同時に、我士卒の患者の衣服に取附きゐたる者は無慙や石炭酸の爲に殆んど殺され盡した。彼等は尙ほ我々の殘黨あらむことを恐れて、石炭酸に浸した「ズック」の嚢に其衣類を收め、更に蒸氣釜と稱する焦熱地獄に投じて鏖殺した。患者の身體に附着いてゐた者は安心と思ふて居る中に、忽ち又彼等は消毒藥を以て全身に附著せる我黨を屠り、患者には我等に緣なき新衣を著せて病室内に運んだ。茲に於て腹中に潛みゐたる後備の大部隊も吐瀉物に乘じて逸早く逃出さんとしたが、其都度有力なる消毒

藥の襲擊を蒙むつて討死し、或は蠅に取縋つて遁れんとすれども、病室の要害堅固にして、金網を張つてその侵入を防ぎ各所に蠅黐を備へて萬一を慮つて居る。或は患者の食器又は藥罎になりとも取付きて遁れんと企てた者も端なく鹽酸水の中に投じて殺された上に、息の根の全く絶ゆる迄、蒸氣消毒竈の内に投ぜられた。尙ほ敵兵等は大便其他大凡消毒藥を注いだ物も、我等の生殘者あらむことを慮り熔鐵爐に等しき竈の中に投じて悉く灰となした。昔蒙古の大軍が我々と同じく此日本に押寄せた時に、北條時宗と云ふ者の逆擊に逢ふて遁るゝ者僅に三人のみであつたと云ふ事を聞て居るが、我軍も斯の如くにして全滅せらるゝに至つた。しかのみならず我々は折角擒にした其病人をも殺すことが出來ずに了つた患者が若し自分の家に居つたならば、我々は猶ほ脱出するの餘地もあり、又如何に名醫の來るとも、便利を缺くを以て其術を逞しうすることの出來ぬ場合が多い。然るに病院に於ては最初より我々に對する所有防禦攻擊の準備を整へて居ることなれば、患者の來るや、其狀態に應じて盛に食鹽水其他の藥劑を皮下に注射し、又は脈管内に注入し、或は我輩等が占領して以て本營と定めたる腸の搦手より藥液を灌注して我等を驅逐せんと試み、又我々の毒を以て人間生命の本城たる心臟を陷落せしめんとすれば、之を對する藥力を以て維持することに努め、尙ほ危險と見れば芥子湯に投ずるなど、種々大仕掛の治療法を以て彼等の同胞を助けんと試みるのである。我黨の心ある者は尙ほも陰に腸中に踏止まり、戰鬪の終れる頃、彼等の油斷を窺つて遁出で再擧を圖らむと企てゝ見たが、彼等は戰鬪終を告げ患者の治後も尙ほ大便を探て顯微鏡下に致し、我等の存否を監察し、我等を培養基なる好餌の中に誘ひて日々偵察し我々の一菌殘らず絶滅するまでは毫も其手を弛めぬのである。

本病人の攻擊に參加した我軍は斯の如き惡戰苦鬪の後遂に大敗北を來して、幾萬の勇士悉く敢無き

最後を遂げたが、扨て一方、前の木賃城内に於ける我々の一隊は、早くも我軍不利なるを察し、周圍の者の衣服に武者振り付きて、其體内に侵し入り、尚ほ別働隊は吐瀉物と共に深く疊又は便所等内に潜みて再擧を計つたが、敵軍の衛生隊は患者の同宿百人に近き面々を車に乗せて隔離所と稱する所に運び終ると同時に、我々の潜伏せる疊と云はず便所となく城内殘る隈なく消毒藥を浴せかけ、我が殘黨は此處に亦無念の切齒をなして悉く死に就いた。

更に隔離所に於ては如何なる事を爲すやと見て居つたが、右の百人の者の隔離所に著くや否や、同所に待構へたる醫師、看護婦等は銘々の衣服を、石炭酸に浸したる袋の中に收め、直ちに浴場に導いて三%の「リゾール」湯を以て全身頭に至るまで十分に洗はせ若しも我等一箇たりとも附著するものあらば之を殺さむと計り、其上清水を以て全身を洗ひ潔め、別室に導きて白色の衣服を纏はせ、程よく五六人づつ各室に案内し、尋で我々に對し不都合極まる種々の注意を言ひ聞かせた。偶〻一人の腹中に潜み居たる我黨の士は、此有樣を見聞して、こはかなはじと怖毛を顫はし、油斷を見すまし便所よりなりとも遁出さむものと種々工夫を廻したるが、平素の便所は悉く封鎖し、銘々の姓名を記したる便器の外には排便することを禁じ、而かも其の大便は一々之を採つて試驗を行ふべき準備がしてある。手に著きて遁れむとすれば、排便の後又は食事の後等には必ず消毒藥を用ゐて我々の逸出を防ぎ、食器等も同院に於けると同じく鹽酸水中に投じたる上尚も煮沸し、隔離者の爲に種々の遊具、書物等を備へて互の交通を禁ずるなど、我々に對する警戒をさ〳〵怠りがない。腹中に在つた我黨は此の爲體を見て、觀念の眼を閉ぢ運を天に任せてゐたが、大便の試驗に依て遂にその發見する所となり、本人は保菌者と名づけられて他の病室に移され、消化良き食物と藥劑とを與へられて我黨の威力を示すに由なきやうに保護され、我黨悉く自刃をするに及んで保菌者は無事に退院し

他の人々も五日の後一旦消毒されて安然なる彼等の古巣に還つた。

以上は我が同志の者が、今際のきはに或方法を以て向後の警戒の爲にとて書き送つた一端であるが、我々は往々彼等が隔離所に送らるゝ前既に爆發の準備を整へ、彼等の收容されたる後に於て病に罹らしむることあるも、兎に角彼等が發病すると同時に隙さず治療を加へらるゝを以て我々の目的を達することと能はず、再び健康に復するものが多い。我々が大正元年及び今年に於て隔離所内にて幾何の人を病ましめ、幾人の保菌者を出したかと云ふ事は我が參謀本部の記錄に明記されて居る。

若し彼等が昔の如く病を隱蔽し、所謂偵察隊なるものゝ眼に觸れなかつたならば、其患者を殺した上に勝誇つたる我軍勢は幾多の人間を屠り、又保菌者たる者に不養生をなさしめて發病せしむることが出來たであらう。實に彼の屆出なる者は我軍に取つては大敵中の大敵である。然尚ほ我々は絕望するに及ばぬ。我々の乘ずべき隙間は幾らも人間にある。彼等の中には往々尚ほ病を隱蔽する者がある。乃ち彼等は我々の襲擊を蒙むつた事が世間に暴露するを不名譽と考へるのである。我々から考へれば勿論それは不名譽であらう、然し出來て了つた事は致方がない、若し彼等の爲に圖らば、此上の不名譽を重ねぬやう屆出をなして我々を退治するの方策に出づるより外はあるまい、我々は消毒藥等の攻擊に逢ふて生死の衢に出入することが多いから、一度顚落ちるときは度胸をきめて谷底までも顚落ち、全力を匍登ることに集注する。生半に蔦葛に取縋りて落ちまいとし、而かも尚ほ匍ひ登らうと力を二つに分くるのは愚であると覺悟して居るが、淺ましき人間には此邊の覺悟が少ない、若し彼我の地位を換へしめば我々は直に屆出をなして善後の計をなすを以て最上の謀と考へる。又彼等近眼小慾の人間は自分の商賣の妨になる事を考へて屆出を躊躇する。然し彼等が私かに消毒を行ふ位にては決して我々一族を殺盡するこ

とは出來ない。必ず我々は一人を斃し、尙ほ進んで家族を屠らねば止まぬのである。彼等は黃金の貴きを知つて家族竝に公衆に對する愛と德義とを辨へぬ者共である。

右の如き徒輩は我々に取つて最も便宜を與ふる者で人間から云へば所謂露探、獨探或は虎探とも稱すべきものであらう。

我々は小身ながらも武士である、消毒等に對しては他の菌よりも弱いが鼻端は强い。兵をやることは機敏である、彼等より云へば江戶つ兒である。彼等の怨は之怨として十分に警告を與へ旗鼓堂々陣頭に相見えんとするのである。機山鹽を贈るの俠氣は我一門の誇とする所、是れ我が不利をも顧みずして敢て警告を與ふる所以である。然しながら兵は詭道なり、我々とても常に正道のみは用ゐぬ、例へば保菌者なる者を放つて敵の目を暗ますが如きは詭計である。尙ほ我々は我兵を四方に送らんが爲め、人間の眼をそばだてぬやう僅かに人を病ましめ、輕微の下痢を續けて人目を誑かすことがある。特に小兒などを借りて此法を用ゐることが多い。乃ち「チスペプシー」とか云ふて警戒を怠つてゐる中に、我々は首尾好く消毒の厄を免れて四方に向つて攻擊を開始するのである。我々は敵國侵入の初期に於て多く此法を用ゐて十分なる準備を整へ、戰の終に於ても豫定の退却をなさむが爲に亦此法を用ゐて人を油斷させる

我々は人間の爲に我が內情を探知せられ、漸次逆境に陷つてゐるのであるが、最後に至るまで武門の名譽を重じ茲に我が六韜三略を公開して置く。

(九)利用されたる「コレラ」菌の俠骨

(豫防接種)

我輩等の眼より觀れば人間ほど詐の多いものはない。彼等は口に人類の幸福、平和などと唱へながら、利害の問題となれば忽ち戰爭を始める。平時に於ては、戰爭は單に或問題を解決するに止むを得ざるの具であつて、人を傷るは止むを得ざる手段たるに過ぎぬ、故に兵器はなるべく戰鬪力を失はしむる

に止め、其生命に危害を與へぬ程度のものを用ゐねばならぬなどと唱道し、實際砲彈等も之に適ふやうなものを造たりして居る。然るに實際戰爭となると忽ち彼等の殘忍なる本性を現はし、或は地雷を敷設し或は毒瓦斯を製し、或は爆裂彈又は「ダムグム」彈などと殘酷なる兵器を用ゐて恬として平生の所論を顧みない。然るに我輩等に至ては敵を愛するの心を以て、眞に止むを得ざるにあらざれば容易に敵を斃すことはない。彼等の死するは我輩等の殺すにあらずして、彼等の體質の缺損が其原因をなすのである現に我々は一度彼を病ましむれば、其の體中に免疫體なるものを作て彼等を癒さむと計つて居る、啻に彼等を癒さむとするのみならず、彼等が永久に我々の手に掛からぬやうにしてやるのである。一度彼の痘瘡の手に捕はれて癒えたるものは生涯痘瘡に罹らぬは兒童走卒と雖、知つてゐるではないか。所謂武士は相みたがひ、敵ながらも戰爭に痛手を負ふた勇士に對する武士の情と謂ふものである、是れは單に我輩のみならず痘瘡を始め、腸「チフス」、痲疹家等我々菌族各武家の作法として居る所である。然るに人間の奸智に長けたる、我々の此の情義を知つて以來、恩に酬ゆるに仇を以てし、我々を捕へて生存に適せぬ處に移して我等の體力を弱め或は熱を以て我我を殺し、既に戰はざるに先立つて之を自らの體内に注射し、其體内に於て我々が彼等の細胞軍と接戰する際に作ると同樣の免疫質なるものを作つて、我我が侵入するも其力を逞しうすることの出來ぬやうに企らむで居る。この免疫質なるものは我々と刃を交へたる勇士にこそ與ふべきものなるに、彼等は戰はずして豫め斯く防御法を行ふは甚以て卑怯の振舞ではあるまいか。何れにしても彼等は今や治療血清又は「ワクチン」なるものを作つて盛に其の皮下に注射し、之を以て我々に抵抗せんと試みて居るその「ワクチン」と稱するものを糺して見ると、こは卽ち我々同志の屍骸と異ならぬものである。初め英國のハフキンと云ふ男は我々を巧に培養基中に誘ひ

奸策を弄して我々の身體を弱め、生きながら之を人間の皮下に注射した。我々は人間の口から腸管内に攻込むでこそ甲斐々々しく働くことも出來るが、全く地理不案内の而かも地層の間の如き皮下に追込まれては到底死するより外はないのである。我々はその最後を遂ぐるに方つて體内の毒を吐き、これに由て自ら彼等の體に免疫質なるものを賦與するのであつて、その免疫質なるものは、爾後彼等の體内に侵入する所の我々同志の身體を溶かし殺すものである。其後獨逸のコルレーと稱する男は、注射前に我我を殺すも猶ほ同樣の結果を得ると信じ、彼等慣用の奸計を以て我々同志を誘き出して培養基なる好餌の中に住ましめ、我々が歡樂に醉ふて子孫を作り盛に繁殖するを待て、忽ち五十六度の熱中に投じて殺し、その死骸を食鹽水に混じ、尚ほ執念くも〇・五%の「カルボール」を加へて生存者を殺し、之を人體に注射して以て我々の襲撃に備へむとして居る。今現に日本に於ける我々の挑戰に對して彼等が盛に注射して居るのも、この憐むべき我が同志の屍骸である。この注射は、人間が豫め「モルモット」に試みて、その效あることを見定め、後數次の我々との戰爭に際して人體に試み、此の法を行へるものは、行はざる者に比して遙に我々の手に掛るもの少なく、又我々の手に掛れるものも遙に死亡數の少なきことを證明したと云ふて居る。彼等は斯く信じては居るが、併し彼等自身にも猶ほ種痘の如くに百發百中その目的を遂し得るや否やは確言することが出來かねて居る。然れば彼等仲間に於ても、斯くその效果の未だ確實ならざる以上、この注射を行ふと同時に、普通の豫防法をも行はねばならぬこと勿論であると稱へて居る。この方法が果して彼等の期待する目的を遂し得るや否やは、我輩これを知らぬにしもあらねど、茲に見ることが出來ぬ我々は、既に武士の雅量を以て彼等に我が計略の大體を打明かしたが、この注射法の結果如何に至ては、實に我が一門安危の分かる丶所、これを打明くるは我が一族の命脈を

絶つものであつて、我が祖先と我が同族とに對して爲し能はざることである、卽ち彼の宋襄の仁の嗤を後世に殘すは我々の忍びざる所である。然れば暫く彼等の爲すがまゝに任せ、我々は思ふが如く此の戰鬪を繼續しようと思ふ。但し彼等は、我々が人間中に於ても心臟の病を有するもの、妊娠せるもの、肺肋膜等の熱を發し易き病に罹れるもの、脚氣を病むものゝ如き憐むべき人間に對して注射せらるゝ時は我が同志は時に强劇なる反撥を試むることあるを知つて、注射を避くるか或は先づ少量を試むることに注意して居る。

彼等は又「ワクチン」と同樣に我々の屍骸を馬等に注射し、免疫血清なるものを作つて之を患者に注射し、我々に抵抗せむとし或は防禦の用に供せむとして居る。併しその防禦の效力を有する期間は遙に「ワクチン」よりも短く、注射に方つて「ワクチン」よりも反應强く、治療の效も亦確かならずと考へて居る。是亦我々は前述の理由を以て姑らくその當否を確言せぬ。

十、「コレラ」偵察隊の報告（患者發生時の注意）

病院、學校、寄宿舍、旅館等は我々の目的を逹するに最も都合の好い處であるから、我々は「コレラ」菌軍中に於ても特に進退趫捷にして詭計に富み、戰術の理解力を有し、機を察する銳敏にして果敢斷行且奮勵して非常の困阨に耐ふべき者を選拔して、廣く各方面の搜索勤務に當らしめ、諸種の情報を得た。その報告中には頗る參考となるべきものがある。

病院方面の搜索勤務に從事した、我が將校斥候たりし一菌の報告は次の如くであつた。

病院　凡そ人々の多く集る處で最も防備の嚴重なるは病院であらう。我々が見舞物の果物に附いて受付に行くと、目下「コレラ」病流行に付き食物等の見舞品を持込むことは堅く御斷り申候とばかり貼札がしてある。これが先づ第一の蹉跌であつた、是に於て本菌は風呂敷の中より院內の樣子を隱なく觀察

したが、我々に對する防備は中々嚴重である。賄場に於ては我々の乘じ得べき食物等は一切嚴禁され、諸般の消毒も亦怠なく、此處に立働く者共は悉く豫防接種を受け、時々糞便檢査を行はれる。其他蠅に對する用意まで周到を極めて居る。一方病人に對しても只漫然たる警戒にては不十分とあつて、各棟々に依り醫員並に看護婦に夫々責任者を作つて、病人は固より附添、見舞人に至るまで其の容子を拔目なく監視し、故なくして下痢を起す者ある時は直に糞便檢査を行ひ、又萬一の場合を慮つて患者及び隔離者を容るべき室までも用意してある。此の如く警戒嚴重を極めたる事なれば、斯くては到底手を下し難しと見て、見舞品と共に引返した。

今度は手を替へ、病人を誘かして外來診察所に乘込み、一躍、患者の集會所へ切入らむものと、釣臺に乘つて出掛けたが、入口に到るや忽ち阻害され、別室に逐さるゝと同時に端なく警官の手に渡されて了つた。

是に於て種々深謀を廻らしたる末一計を案出したそは茲に所謂「モグリの附添」と稱する者がある、彼等は看護婦の如く病院の監督の下に在るにあらず、曖昧なる者にて、病人に於て必要の場合、賄人等の周旋にて急場の間に合はすやうの習慣となつて居る。從つて無智の老婆などが多く、到底我々に對する歩哨の守則などを理解し得る輩ではない。彼等は時々その哨所を離れ自宅に歸て飲食し、患者の殘飯、殘肴を安く買受け或は自炊して食ふ有樣にて、到底、話にならぬ徒輩である。彼等の擧動曖昧なるだけ、監督の手は彼等にまで及ばぬことが多い。我等はこの軍規に慣れず且つ怠慢なる雁歩哨に目をつけ、彼を擒にして全軍を威嚇した。即ち彼の老婆は事に託して患者を親族の者に賴み、一日の休息を貪らうとして自宅に歸り、終日遊び暮らしたる末、潰餡の金鍔をしたたかに食ひ、氷水を飲み、更に隣家の泥鰌屋より生泥鰌を買ひ求めて之を柳川に拵らへ、ウンと食らうて病院に歸つて來た。我等は此際

機會は好しと食物と共に老婆の腹中に潛むだものである。翌日三時頃に至つて愈〻便所内に於て一大爆發を試みたが、當人は、大凡下痢ある者は速かに其旨を屆出よと云へる豫ての軍令に畏をなし、二三時間は祕密にして置たが、到底堪へかねて、私かに自宅へ逃歸らむと廊下まで出たる所を、怪しと見て取つた看護婦に捕へられ、直に隔離室へと送られた。一度この報に接するや醫員は駈け來つて糞便の檢査を始める。消毒藥を提げて便所の消毒に掛かる。老婆の居たる病室は封鎖して同室の患者を隔離する。その混雜は一方でなかつた。初め老婆の怪しまれざるに先立つて、我々は院内に設備せる冰箱の中に忍込みて一事舉げむものさ、人手に著て、それとなく患者の冰嚢を持て冰箱の傍に近づき、冰を碎くと共に冰箱の中に殘り、此處より看護婦等の腹中に飛込み呉むとの計略なりしが、看護婦の外濫りに冰を取扱ふことが出來ぬと云ふ軍規の下に、看護婦に擊退された、併し醫員は容易に此の報告を信ずる氣色なく、直ちに冰箱閉鎖の命令を下すと共に、冰を食らへるものには、病の起らぬ中に良藥を與へると稱して患者並に看護婦等を尋ね廻つたが、幸ひ此日は非常に涼しかつた爲め、實際一人も冰を食ふた者とてはなかつた、醫員は執念くも尚ほ冰を悉く盥に取出して昇汞錠の多量を打込み、臭くなつても構はぬとて、冰室内にも遠慮なく石炭酸を灌ぎ掛け、それより進んで決水槽を消毒する、食器は鹽酸中に投じて煮る。賄所の大消毒が始まる。それより賄人等の糞便檢査終了まではと、病室内に口も燒けんばかりの粥の大鍋と露物の鍋とを持込み、完全に消毒したる食器に盛て患者に食はせる。この騷動の爲に朝食が十一時頃となり、患者の空腹を訴へゐたるも氣の毒であつた。

彼等は敵襲と聞くや、斯くの如く我々に對して大膽機敏なる警急集合動作をなし、注意萬端到らざるなきは、轉た警服に値するものであつたが、茲に一つ我々に取つて可笑かつたのは虎子缺乏の一事であつ

た。彼等の神經質なるや便所を封鎖し、患者、看護婦とも悉く便器に排便せしめ、數日間に亙つて所謂保菌者の有無を調べようと企てたのである。然るに差込便器の少數と僅かの虎子が有るのみにて、到底、總人員の五分の一にも足らぬ。若し便器の消毒を充分にし、取換へ引換へ間に合はせようとするには、少なくとも人員の倍位の數はなければならぬ。目下彼等人類同志の戰爭にて亞鉛の騰貴せる時に方つて斯くの如く隔離所等に於て一時に三十餘個の虎子を得んとするは實際非常に困難の事である。虎子の恐慌は實に噴飯に堪へなかつた。そこで彼等は窮餘の策として市內隔離所の出入商人と、同病院の出入商人との同じきことを知つて、その隔離所に納むべき出來合ひの虎子を此方へと歎願して辛くも其場の急に間に合はせた。彼等と雖、實戰に臨むでは、天下太平の日に兵を談ずるとは事變り、兵刃既に交はり亂軍の狀況となつては、食器の消毒、消毒藥の配布に要する桶類、瓶類等の如き卽坐に必要なる物の缺乏を感ずる場合が少なくないやうである。斯の如き場合に方つては彼等は何かの必要あるべしとの協議の上速かに御用商人の出馬を促がし、考の浮ぶに從つて軍用品の調達を命ずる。この命を受けたる商人は電話を四方に飛ばして速かに之を調達する。この光景を見たる我々は、所謂御用商人なる者は、數ふるに足らざる輸卒とのみ侮りゐたるに、斯る際には我々に取つて容易ならざる一大敵であると考へた。更に聞く所に依れば此の城內には、發疹「チフス」、「ペスト」及び我々等が彼等に對して强敵と認むべき者が市內に侵入すると聞くや、傳染室には他の患者を收容せず、我々が城內に忍びて爆發を試むる時に、患者及び傳染の疑ある者を隔離する爲に充てゝあると云ふことである。是亦我々に取つて油斷のならぬ防備と謂はなければならぬ。斯の如き有樣にて、病院は人衆の集まる處なれば我々の目的を達するに屈竟の處と思ひしに、案に相違し、只呆然たるばかりであつた。

學校　次に小學校方面の偵察に向へる斥候の齎したる情報は次の如くである。

本菌小隊は命令に依り直ちに市內各小學校に向て强行偵察を行へるが、此處も既に我軍の襲擊を畏れ學校醫を參謀長とし敎員の面々も頻に警戒をして居るを認めた。便所に消毒藥を備へ、生水を飮むことを禁じ、我々に誘惑されたる如き疑ある小兒は之を別室に置きて狀態を觀察する等の注意をして居る。城內の警備此の如く嚴重なるを以て、其の兒童軍を侵すこと決して容易ではない。併し近時彼等の間に問題となれる掃除作業は、我々も亦之を利用し得べきものと考へた。元來我々に取つては乾燥は最も忌む所にして一度乾燥せらるゝに於ては容易に死するを以て、到底校內の塵埃中に宿營することは出來ぬ併し東京市中には今日の世に於て猶ほ店前の溝水或は我々の水雷を敷設して居る河水を道路に撒く者あるを以て、泥土と共に兒童の足袋などに飛付きて板の間の隅に潜み得ると考へた。掃除作業に從事する兒童の隊は、時間の都合上是非辨當を携行せねばならぬ。兒童隊は盛に掃除をする。腹がへる。是に於て乎、手の消毒もそこ〳〵辨當を食ふ。我々は此機會に於て彼等の腹中に闖入すること敢て難くはない、且つや夏の暑さに多少變敗した辨當が腹中に於て陰然我々に助勢するに於ては、必ずしも此の計成らざることはあるまいと思はれたが、敵もさるもの此處に氣がついて遂に辨當の持參が廢せられたは遺憾である。

旅館　尙ほ我が一隊は及ぶ限り偵察の眼を廣く放ちつゝ歸路に就たが、途中瞥見する所によれば旅館に於ては猶ほ我々の乘ずべき點が少なくない。

寄宿舍　寄宿舍も同樣であるが、此處に立籠れる徒黨は學問をし多少事由を解する者共のみなれば、之を襲ふ事は比較的困難と見受けた。併し此處には我々に內應せしめ得べき賄と稱する者の住込めるあれば、彼等に喰はすに利を以てせば、往々案外なる奇效を奏することが出來ようと思ふ。

便所の燈　終に臨で我々は例の任俠の心を以て病院、寄宿舍其他に向つて警告して置き度い事がある。それは外でもないが一體我々に取つて最も都合好く、彼等に取つて最も不利なるは便所內の燈明である。彼等は現に電燈と稱する便宜なるものを有しながら、便所の內を明るくすることを知らぬ。白晝便所に入ることを恥ぢぬ人間が、夜ばかり光に恥づる必要はあるまい。我々に襲はれたる者は必ず吐瀉物を以て便所を汚す。之を知らずして夜間同便所に入る者は、我々の飛付くに最も便利なる者である。萬事に小賢しき人間は之を防ぐ爲に何處よりも明るくして置くべき筈の便所を好むで暗くして置くのは寧ろ不思議である。既に便所內に於て散兵したる以上我々が彼の消毒藥なる液火を以て殺戮さるゝも晩れ早かれ只時の問題であるから、我等はわるびれずに玆に此事を人間に忠告して置く。

病院、學校等に對する我等の作戰計畫並に實戰の狀況等も略ぼ前段に述べたが、最後に我輩が或

裏長屋

殊勝なる女丈夫　裏長屋に攻入つたる際雜兵ながら天晴なる防戰をなしたる敵の一女性に遭遇したことがある。名に聞及ぶ巴御前、ジャンダルクとても、我々に取つては斯くはあるまじと思はれたるがまゝに、世の談柄にもせよかしと、玆にそのあらましを物語る。

さても此の裏長屋の主人といへるは、運漕船に關係ある男にて、身體極めて頑丈なるが、右の腕には「御意見御無用」、左の腕には「此命差出申候」と入墨をして居る。斯る勢なれば我々「コラレ」武士なんどは到底近づき得ぬものと自ら信じてゐる。その女房なる者も亦亭主に似たりと云はんか、至つて甲斐々々しき女にて、能くこの亭主の亂暴なる行爲を取靜めてゐるが、さて外までは目も屆きかね。彼は人の用心を嘲笑ひて刺身を食らひ酒を飲み、醉醒には盛に生水を鯨飲するの有樣である。

これこそ我々に取つては最も乘じ易き痴者、いで

目に物見せくれんと我々は遂に彼の腹中に忍込み、私かに爆發の用意をなしゐたるが、一夜深更に及んで俄然彼は猛烈なる吐瀉を始めた。こゝに女房は如何なる振舞をするかと見てあれば、先づ子供を九尺二間の緣側に出して近寄らしめず。自らは寢卷のまま夫を介抱しつゝ塵取をおつ取るよと見る間に臺所より一杯の灰を持ち來り、夫の吐くにまかせて傍より灰を振掛け、金盥には酒を湛へて自ら手を浸しつゝ大に呼んで隣の人を交番に駈つけて此趣を訴へさせ、尙ほ酒屋より酒を買ひ來らむことを託し、且その酒は戸口に置きて、自分の家の内へは一歩も入り呉れなと言ひ添へた。さてその酒は之を夫に飲ませ、更に金盥に注さしては手拭を絞り、患者竝に自分の身體の汚れたる所々に滴らしつゝ防戰に努めた。さる程に警官が來る、醫者が來る。自分と子供は隔離所に、夫は病院に送られたが、やがて親子三人目出度く元の九尺二間に立戻り、それより流石の夫も亂暴を止め、一家團欒の喜を致したるは、敵ながらも目出度事共と我々の間にもとりはやされた蓋し彼の女房は區内の「コレラ」豫防會に於て、酒は「コレラ」菌を殺し、灰には多少の消毒の效あるのみならず、吐瀉したる物につく蠅を防ぐに足ると聞きゐたるが爲に、消毒としては元より極めて不十分の事ながらも、兎に角この場合に臨むで最善の策を施したのである。九尺二間の住人までも斯の如くに我我の防禦策を知るに至つては、我々が一門の衰運も目の前に見ゆる心地して、如何か爾後の作戰計畫を變へねばなるまいとは、我が偵察隊の報告であつた。

（完結）

雜報



○「コレラ」來る

七月頃上海に「コレラ」流行の報ありしが、八月下旬神戸に發生し、八月三十日横濱にこれを見、それより日々二三名づつの新患者發生し、遂に東京に侵入するに至れり。

○水上署の見張船

警視廳の「コレラ」豫防の指令に基づいて水上署では向ふ一ヶ月間見張り船二艘と五組の巡檢隊を派出することになつたが第一の見張り船は月島三號地の兩側を第二の見張り船は芝浦日の出町海岸をそれぞれ警戒し防疫官、防疫醫、水上署員が各二名宛乘船して出入する船舶業者の檢疫採便をする五組の巡査隊は柳原、立川、南千住、日本橋川と箱崎川、芝浦方面に分かれて碇泊中の船舶業者の檢疫採便を行ひその日のうちに芝區愛宕町三の六東京細菌檢査所で檢査する事となつてゐる、また四日から施行する豫防注射班は四組に分かれ各班について署員二十名、防疫醫、防疫係各二名宛が乘船し水上署や南千住等で強制注射をする手筈である。

○「コレラ」帝都を襲ふ

疑似患者と目せられた芝區片門前町の小張某、神田區猿樂町の高橋某及び本所元町岡田所有傳馬船々頭椎名某その內緣の妻は八日午後何れも眞症と決定したるより、市保健局では警視廳と共に大活動を開始し傳染系統につき極力調査中だが小張は六日夜發病したので本人が重態で口も利けぬ始末なので的確に知ること出來ぬがやつぱり横濱方面であらうとの見込みである、また高橋は妻が神奈川縣平塚海岸に轉地中なのでその見舞に行き四日午後歸宅同夜發病したので系統は平塚方面なる事は疑ひないと、その外傳馬船頭椎名內緣の妻は夫と共に五日午後二時

ごろ品川を發して同沖合に差しかゝつた時急に數回の下痢と吐瀉を催したが船頭特有の迷信から船霊がよごれるとてその汚物をことごとく海中に投棄し同夜九時ごろ芝浦著醫師の診察を受けて一旦歸船し六日午前六時ごろ本所竪川河岸についたころ船中で死亡したのであるが系統も船乗である關係上横濱方面であることはあらそはれぬ事實である。當局をおどろかしたのは同人發病後の汚物を海中に投棄した一事で今や品川灣全體は「コレラ」菌の巢窟と化した譯けだから沿岸漁撈や水泳等は最も危險である。

○品川灣の警戒

本所竪川に入つて死んだ船頭が「コレラ」吐瀉物を品川沖邊にかけて投棄したことはあの邊の海によつて生きる一帶の人々は元より市民の恐怖を一層おびやかして來た七日朝警視廳から急報に接した水上署は一大事とばかりに署長以下衛生班は大活動を開始し直に羽田大森邊になほ殘存してゐる水泳場に對して斷然たる閉鎖を命ずると共に署員から組織した巡視班巡檢隊見張船の三部は大いに緊張して横濱方面から入り來たる船の見張りを嚴重にすると共に各河川に繋留してある傳馬荷足等の家族各部の健康診斷をいそぎ一方數日前から開始した「ワクチン」注射を強制しつゝある、同署の植原衛生主任は語る

水はこの際非常に危險なものですから嚴重に注意し船の生活者は既に今日迄注射は一萬人も濟みましたけれどもまだ一萬人もありますこれが出入の劇しい者で非常に困難で署の見張船で追跡しては夫夫嚴しく調べ濟まない者はピシ／＼注射をして居ます市中に入つては大變なので目下大汗です

なほ立會川及び中川等一帶の漁業を嚴禁した。

右につき井口技師は語る

系統は判然しないが同人等は茄子胡瓜鹽鮭等を食してゐるので食物から來たものとは思はれぬが品川繋留中食器を海水で洗つたか或は下などが海水に濡れ自然に口中に入つたものらしく品川の海上大井立會隅田川埼玉縣竪川筋は悉く病菌に汚染さ

れて了つたそこで只今廳令を發し前述一帶の水上では漁撈海草採取水泳を禁じ海水飲用を嚴禁し違反者は處罰することにした。

○辨當屋に「コレラ」

八日眞症「コレラ」と決定した芝區小張某(四七)は五日夕食に鮪の刺身を食ひ六日午前二時ごろからはげしい吐瀉を起こし苦悶をはじめたので同十時ごろ愛宕町の野口醫師の診斷を受た所「コレラ」の疑ひがあると愛宕署に屆出たので係官は時を移さず患者につき採便數回檢鏡した結果不幸にも陽性と決定した患者が同居してゐた家は辨當屋で附近三十四軒の配達先があるので當局は同家の大消毒を行ひ家人十三名を隔離豫防注射をし辨當を食つた數十名の便を採り目下檢鏡中だが蔓延の兆あるので警視廳衛生部は緊張のうちに匆忙を極はめてゐる。

○全市豫防注射

コレラ患者の發生により市保健局では豫ての計畫に基づき市民全部に對し豫防注射を行ふべく各區役所に通知するところあつたが各區では各町會其他の團體と聯合九日から一齊に注射を無料で施行する外多數患者の發病を豫想し大久保病院を收容並びに隔離所にあつることとした。

○電車の大消毒

電氣局でも「コレラ」の對策につき七日正午大會議を開た結果從業員一萬五千名に對し豫防注射を施すと同時に千五百臺の電車、五百餘台の圓太郎に對し三日間に亙り各車庫で大消毒を施す外乘客中に萬一吐瀉下痢等の疑はしきもののある時は乘務員は直に他乘客を全部下車せしめそして最寄り交番と乘務員監督に急報故障車として最寄り車庫の隔離庫に入れ「ホルムアルデヒード」の瓦斯消毒を密閉室内で行ひ七日間之を放置した上使用する外患者は警官立會を求めて最寄醫師に診察せしめ然る上保健局をして適當の處置をとらしむる外電氣局庶務課に防疫班を設け通知あり次第一切の防疫藥を積載自動車で現場に出動附近街道を遺漏なく消毒することになつた。

私立大日本婦人衛生會役員氏名

總裁 東伏見宮大妃周子殿下

會長 侯爵夫人 鍋島榮子

副會長 子爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

理事 鳩山春子　同 長谷川仲子

同 岡田德子　同 高木鑅子

同 山口貞子　同 天野多喜子

同 三浦敎子

評議員 入澤常子　同 羽田三緒子

同 服部繁子　同 原光子

同 子爵母堂 仁禮壽賀子　同 土肥多越子

同 緒方悅子　同 岡山とし子

同 小川孝子　同 男爵母堂 加藤鈴子

同 片山龜子　同 吉岡彌生子

同 丹波貞子　同 高橋孝子

同 中濱芳子　同 松平芳子

同 子爵母堂 松井正子　同 男爵夫人 古市幸子

同 近藤憲子　同 相磯まさ子

同 男爵母堂 青山孝子　同 岸澄子

同 菊地糸子　同 宮本樂子

同 三宅藤子　同 守屋千代子

同 瀨川さわ子

大正十四年九月二十八日印刷

大正十四年十月一日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區駒込千駄木町五十八番地 莊司秋次郎

印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 柴山則常

印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 合資會社 杏林舍

發行所 東京市本郷區駒込千駄木町五十番地 私立大日本婦人衛生會事務所（振替東京一〇六〇〇番）

賣捌所

東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂

同 市銀座三丁目 東海堂

同 市京橋區鎗屋町 眞明堂

同 市本郷區龍岡町 南江堂支店

同 市芝區愛宕町 明文館

京都市寺町二條南入 若林茂一郎

東京京橋元數寄屋町 北隆館

同市神田區表神保町 東京堂

同市本郷區本富士町 盛春堂

名古屋市榮町六丁目 丸善書店

腸疾治療劑

ラクトスターゼ

ラクトスターゼはメチニコッフ博士の腸内容中毒説以來有名となれる乳酸菌製劑にして、同博士の以て最良となせる眞正ブルガリアン乳酸菌を生活狀態に於て保有するものなり。本品中に含有せらるゝ乳酸菌は腸中に至り茲に繁殖を遂け乳酸を釀成して腸内の異常醱酵乃至腐敗を防止し蛋白質の消化分解を完全ならしめ同時に適度なる刺戟を腸壁に與へて其分泌、吸收、蠕動の主要官能を旺盛ならしむ、依之諸般の腸疾患を防ぎ進むで腸内容の防制腐に乘て其排泄を迅速ならしむるか爲め新陳代謝順調となり、所謂早老豫防の效果を完ふし得と稱せらる。

適應症　異常醱酵性下痢、人工營養兒の消化不良、急慢の腸加答兒、皷腸、常習便秘、腸内有害產物吸收の結果として生する蕁麻疹、濕疹等の皮膚疾患、腸性貧血、慢性腎炎肝硬化及蛋白質多食を必要とする諸症例へば肺結核、糖尿病等。

■粉末、錠劑各種あり。■各地有名藥舖にて販賣す　■文献染發賣元より贈呈すへし。

本　社　東京日本橋區室町三丁目
出張所　大阪淡路町・堺北府後街

三共株式會社

婦人衛生雜誌第三百七十八號　大正十四年十月一日發行